
愛美華(まびか)

バンダナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まびか
愛美華

【Nコード】

N8042X

【作者名】

バンダナ

【あらすじ】

普通の高校生活をすごしていた竜田証。ただあかし

ある日突然、謎の美女と出会い、非日常を過すことを決意する。

非日常で何を見るのか？

何と出会うのか？

主人公は最後まで生き残れるのか？

主人公が願うものは？

ジャンル…恋愛バトル物語公開開始…2011年11月7日

プロットを書いていないので矛盾が出る可能性があります。

作者は国語が苦手なので、誤字がある。文脈が変。

設定的に18禁(R18)の描写が行われる。

以上の事をふまえた上で、この小説を読んでください。

もし、性描写が行われる場合はサブタイトルに★をつけます。

前書きにも注意書きをします。

といっても、激しいものは書くつもりはないです。

朝（前書き）

公開することに後悔なんてない。
洒落ではなくマジで。

作者は大学生なので不定期更新になると思います。
ですが、必ず完結させます（ここ重要）。

朝

6月13日月曜日

ピッピピ、ピッピピ、ピッピピ、カチッ

俺は携帯のアラーム音で目を覚ました。

現在7時30分。学校のSHRが8時30分から。
時間は充分にある。

俺はベッドから立ち上がり、1階のリビングへと向かう。

この家は3階建てで、1階はリビング、キッチン、ダイニングなど、基本的に食事をするためにある。

2階は子供部屋。といっても俺だけだ。小さい部屋が4つあるが、すべて空き部屋となっている。

3階は大人部屋。こちらも2階と状況は変わらない。

1階に降りると、すぐ目の前にはリビング、左にはダイニングとキッチンがある。

イスに座る前に台所に居る母親に「おはよう」と挨拶をする。

「おはよう。すぐに出来るから待っててね」

見ると、料理自体は出来ているが、皿へと盛りつける途中だった。

「手伝うよ」

「じゃあ、これをお願い」

既に盛りつけられた皿を渡された。つまり、俺の仕事は配膳だった。何もしないでいるよりマシだろう。

そう思い、料理が盛りつけられた皿を配膳した。

配膳が終わる頃、父親が1階に下りてきた。

俺たちがいるのを見ると

「2人ともおはよう」

「おはよう、父さん」

「あなた、おはよう」

父は挨拶をすると洗面所へと向かった。いつものヒゲ剃りだろう。

しばらくすると父が戻ってきた。そして、3人で食卓を囲み

『いただきます』

と言って食べ始めた。

朝食はシンプルな物だった。焼き鮭、ほうれん草、味噌汁、ご飯といった和食だ。

「母さん、醤油取って」

「はい」

母から醤油を受け取ると、少々焼き鮭にかけた。

これは醤油の風味を味わうためであり、塩分を過剰摂取することはない。

醤油をぶちまけなければ、だが。

食事がスムーズに進んでいく。

20分もすると、皿の上の物は胃袋へと収まっていた。

「ごちそうさま」

「お粗末さま」

自分の使った食器は、自分で台所へ運ぶ。食器を台所に置いた後は自分の部屋に戻り、制服に着替える。

白のカッターシャツ。ズボンは黒に薄く青いラインが入っている。

最後に黒のネクタイを着けて、着替え終了。

すぐに、カバンに教科書、ノート、筆記用具を入れる。

そして携帯電話を手に取り、時間を確かめる。

8時丁度だ。ここから学校までは徒歩で約20分。

家を出るには丁度良い時間帯だ。

カバンを手に取り、1階の玄関へと向かう。

そこには父がいた。父は靴紐を結んでいる最中だった。

「証、今から出るのか？」

「うん。父さんも？」

「ああ」

父はそんな話をしている間に靴紐を結び終えていた。

「枉（まさ（母の名前））じゃあ行ってくる。証、道中気をつけろよ」

「分かってるよ。父さんも気をつけて」

「正（まさし（父の名前））さん、気をつけて」

父は元気よく家から出ていった。

気づいた人もいるだろうが、俺の家族の名前には必ず

「正」という字が入っている。

だから、近所の人たちは俺たち3人を正家族まさかぞくと呼んでいたりする。

「よし！」

靴紐を結び終えた。そしてカバンを片手に

「いってきます！」

元気よく、玄関を飛び出した。

朝（後書き）

ラスボスはもう考えています。
ですが、中間のストーリーが穴だらけ。
早く考えないとなあ。

道中（前書き）

11月はテストで忙しいのに、俺は何をしているのだろうか？

道中

俺の住む街は車が少ない。

理由は、徒歩10～15分でコンビニやスーパーに着くからだろう。長い連休でもない限り、走る車が多くなることはない。

歩くこと5分。大きな公園の前を通り過ぎる。

ここには幾つかの思い出があるが、1番は蓮華^{れんげ}という女の子との出会いが印象的だった。

学校に到着するまで時間がある。だから、その話をしよう。

あれは忘れもしない、俺が6歳になった正月のことだ。

俺は、お年玉を貰い舞い上がっていたのだろう。

お年玉を貰ったのが嬉しくて、お年玉片手に家を飛び出した。

そして、この公園に来た。

理由は、ほとんど毎日の様に、幼なじみ2人とここで遊んでいたからだ。

しかし、幼なじみ2人はいない。その代わり、今の俺くらいの歳（18）で、目付きの悪い男が6人いた。

その男たちは、俺を取り囲み

「ボウズ、いいもん持ってんじゃねえか」

「俺たち金に困ってるんだよ」

「だから、それをくれないかなあ？」

俺は、お年玉をくれてやる気にはなれなかった。

逃げたいが、取り囲まれているので無理。

もし、包囲を突破できたとしても、6歳児の足では捕まるのがオチだ。

万事休す。

そのとき

「その子から離れてください」

凜とした声が公園に響いた。声がした方に視線を向けると、そこには竹刀袋を持った、同い年くらいの女の子がいた。

「おいおい、お嬢ちゃん。「そんな物を女の子が持っちゃいけない」てママに教わらなかったのかな？」

愉快なものでも見たかのように笑う。

「もう1度言います。その子から離れてください」

竹刀袋から竹刀を取りだし、正眼に構える。

離れなければ斬る、ということだろう。

「おいおい、戦う気かよ」

「止めとけ、嬢ちゃん。女が男に勝てるわけないし、そもそも体格が違いすぎる」

男たちの身長は160〜170で、女の子は110程度。

勝てるハズがなかった。

でも、今の俺なら分かる。

最後に言った男の言葉は、死亡フラグや負けフラグ、てやつだ。

「参ります」

勝負は一瞬。あっという間の出来事。男たちは地面に這いつくばり、女の子はかすり傷1つなく立っている。

俺はその光景を理解することが出来なかった。

「外傷は……なさそうですね」

「うん、おかげさまで」

よかった、と女の子は笑った。

「僕は竜田証。君は？」

「如月蓮華きさらぎれんげです」

蓮華は急に顔を伏せ

「あ、あの！」

「うん？」

「良かったらなんですけど」

「うん」

「抱きしめてくれませんか？」

え？と、一瞬蓮華の言葉を疑った。

「ダメ、でしょうか？」

「いや、全然。助けてくれたし、それくらいなら」

俺は優しく蓮華を抱きしめた。

「良かった。交われた」

ボソッと、蓮華が呟く。

「え？ 何か言った？」

本当は聞こえていたのだが、蓮華に聞いてみた。

「い、いえ。なにも」

そして

「では、縁があればまた会いましょう」

「うん、またね」

俺たちは別れた。

それが蓮華との出会いだった。

今なら分かる。蓮華が公園で男たちを倒したことこの異常が。

だからといって、俺は蓮華を怖がったりしない。

何故なら

「あ、おはよう。蓮華」

「お、お、おはよう……ございます。証さん」

可愛くて美人な子に育ってくれたからだ。他に理由があるだろうか？
いや、いや、いや。

何かの縁で、俺たち2人は同じ高校に進学していた。

ついでに、幼なじみ2人も同じ学校だったりする。蓮華と同じクラスにはなれなかったのが残念だ。

如月蓮華は、この街に1つだけある剣道場の娘だ。

幼少の頃から竹刀を振り続けている。

そのおかげで、日頃から会うことは稀だった。

月に多くて8回。少なければ2回程度だ。

だから、蓮華のことを何でも知っている、というわけではない。

高校では女子剣道部に所属している。噂で聞いた話では、今まで蓮華に一本入れた人はいないとか。

性格は真面目。成績は200人中20位と良い。

そのせいで、恐怖や畏怖、憧れや嫉妬など、さまざまな視線が集中する。

だから、蓮華に友だちと呼べる存在はいない。蓮華と仲良くなれば、自分が何かされるのではないか？

そう思っているから、喋りかける人もいない。

それが現実だ。

だが俺は、蓮華と仲良くなりたいと思っている。

そんなことを思考している内に、学校に到着した。

教室前まで互いに無言。

3年2組。

それが蓮華の教室だ。

「何か困ったことがあったら、気軽に相談してくれていいから」

「は、はい。ありがとう、ございます」

俺たちはそう言って別れた。

俺の教室は3つ隣の3年5組。俺の幼なじみ2人も同じ教室だったりする。

「今日も頑張るか」

学校（前書き）

次はキャラクター設定を投稿になる。

学校

「洗脳よりもマインドコントロールの方が質が悪いんだぜ？」
俺は幼なじみである惇あつしに話しかけた。

「朝っぱらからなんなんだよ？」

「それよりもアニメの話しようぜ」

「おい！」

朝から俺たちは仲良しだった。

「そういや、義ただしのやつは？」

俺は、もう1人の幼なじみが来てないことに気づいた。

「まだだよ」

そっか、しししトリオは揃っていないのか、と呟く。

しししトリオというのは、俺たち幼なじみ3人の名前の最後が「し」
で終わっているのが由来だ。

「それで、どうやってらマインドコントロールが出来るのか？ と
いう話だったかな？」

「全然違うだろ！ アニメの話は何処に行ったんだよ！？」

さあ？と惚けてみせる。

「でも、マインドコントロールにかかりやすいか、かかりにくいか
だけ試そう」

まずは手を組む。

次に人差し指だけを立てる。

手のひらはつけたまま、人差し指を出来るだけ離す。

そのままの状態で、人差し指と人差し指の間をジッと見つめる。

そして、自然に人差し指が閉じてくれば、マインドコントロールに
かかりやすい体質ということだ。

「で、惇どうだった？」

「人差し指が自然に閉じていったよ」

「ドンマイ」

俺は優しく惇の肩に手を乗せた。

惇は立ち直ると

「マインドコントロールって、日本でも行われるのか？」

「行われるぞ。地下鉄サリン事件を起こしたオーム心理教が有名だな」

海外だと、ヒットラーも使っていたようだけどな。とつけ足した。

「そのマインドコントロールってさ、変な光線浴びせたり、薬を飲ませて人を操るのか？」

「いや、全然。そもそもマインドコントロールって、操られている自覚がないから。操られている自覚があるのなら、それは洗脳だ」
洗脳とマインドコントロールの違い。それは、操られている自覚があるかないか。抵抗可能か不可能か、である。

マインドコントロールは操られている自覚がなく、かつ抵抗不可能である。

何故なら、マインドコントロールは自分の意思で行動しているからである。

自分の意思で行動している限り、その行動に抵抗を持つことはない。

洗脳は自分の意思と反した行動を強制的にやらされる。

だから、操られている自覚があり、抵抗も可能である。

「こえー」

朝のSHRが始まるまでの間、マインドコントロールの話で盛り上がっていた。

そして1時間目の休み時間。

SHRが始まる直前に入ってきた義を交えて話す。

そして、朝の話をすると

「そんなことがあったのかあ」

「マジでこえーよ」

「そんな話するより、アニメの話をしようぜ」

お前が原因だろ！と突っ込まれた。

さて？ 何かしたかな？

「でも、まあそうだな」

「何か話題あるう？」

少し考える素振りをし

「止め絵と呼ばれてるアニメがあるだろ？」

キャラクターに動きがなく、止まって見えるアニメのことだ。

だから、画像数が少ないアニメとも言える。

「俺は思っんだよ」

一息

「動画は、時間を極限まで小さくすると、全部止め絵になるって」

「あつてると言えばあつてるが……なあ？」

「違うと言えなくもないなあ」

「あ、やっぱり？」

切り替えは早かった。

「なら」

「証。時間がないから次の休み時間だなあ」

時間が経つのは早いな、と思った、1時間目の休み時間であった。

2時間目の休み時間。

「自分が好きなアニメOPを言ってくれ。最低2000年代でな。時間制限は3時間目が始まるまで」

幼なじみ2人は「うーん」と悩む。

最初に口を開いたのは惇だった。

「"うたわ〇るもの"の夢想歌かな？」

「ああ、いよな。あの曲」

「でも、CDのフルだと、最初の金属音がないからな」

あれがないと、"うた〇れるもの"のOPとは言えないよなあ、と言い俺は若干落ち込む。

「しかも、原作がエロゲってことで視聴を避けてる人もいるだろうしなあ」

そして、また落ち込んだ。

俺は、エロゲにはストリー性の物と抜くための物。

この2つが存在していると思っている。

一般的に想像されやすいと思っているのは後者である。

「エロ」とつければ、何でも「エロい」と不純だと思ふな。と俺は言いたい。

何も知らない人からすれば、AV風のゲームをプレイしているように思うのだろう。

しかし、ストリー性のエロゲのエロはオマケみたいなものだ。

1種の手段でしかない場合だつてある。

俺は、エロシーンは毎回飛ばしてゐるがな！

「Euphoric FieldやEbullient Future
reはどうだあ？」
ユーフォリック フィールド エブリエント フューチャー

俺は、義の発言で現実に戻ってきた。

「"ef"か。アレはアニメや動画で見なきゃ意味ないだろ」
えふ

元はエロゲだし、と呟き

「それに、2期はOPが毎回違つてたしな。6話なんて、歌と人が無くなつたんだぞ！」

つまり背景と楽器音だけが流れたのだ。

あまりに斬新なOPすぎて、脳裏に焼きついている。

「それより証はどうなんだよ？」

「俺？ Cath you Cath me？」

惇に向かって言うと

「聞くな！それに、2000年代の曲じゃねえから！それ」
怒られた。ショックを受けるぞ。

「むしろ、2000年に放送された代表的なアニメって何い？」
義が俺に聞いてくる。

「おジ○魔女ど○み#やデジ○ン02かな？」

「おー、そんな時期か」

懐かしさに耽った2時間目の休み時間であった。

そして3時間目の休み時間。

「なあ、惇。俺の考えた恋愛小説の設定（女性のみ）を読んでくれ」
俺は惇に1枚のプリントを渡した。

「えーと、何々？」

ヒロインは5人。内、1人は目の見えない女の子。

1人は言葉を喋れない女の子。

1人は音が聞こえない女の子。

1人は1日すると記憶がリセットされる女の子。

1人は感情のない、分からない女の子。

「恋愛が難しいな」

「だよなあ。でも、ちゃんとした内容になれば売れると思うんだよね」

「ああ、それは確かに」

横から出てきた義がプリントを覗き見る。

「でも、こういう場合、それぞれに主人公をつけるか、最初に出会った女の子と恋愛になるよねえ」

「だろうな。それに、全員同じは不可能だろうな。女の子の障害が相性悪い」

例えば、目の見えない女の子と音の聞こえない女の子。

目が見えないから、音に頼るしかない。

音が聞こえないから、視覚に頼るしかない。

あまりにも対称的すぎる。

それこそ先天性視覚障害と聴覚障害なら詰みだ。

後天性なら、ご都合主義でどうかこうになる。

だが、それでは面白さが欠けてしまう。

何かいい手はないのか！？と現在模索中である。

「証って、将来の夢は小説家あ？」

義が聞いてくる。

「いや。思いついたから、書いてみたいなあ、て思っただけだ」
それに続き惇が

「それに売れなかったら終わりだしな」

将来のことで悩む3時間目の休みであった。

昼休み

「食堂行こうぜ」

俺が2人に話しかける。

「おう。今日は何を食うか迷うな」

そう言う惇に

「今日も、だろお」

義が突っ込みを入れた。

日本は今日も平和です。

「ふー、食った食った」

「惇は食いすぎなんだよ」

「証の言う通りだよお」

3人で談笑する。

するとそこに

「やあ、証君」

学園1のモテ男、柳扇りゅうせんが3人の女子を連れて、やって来た。

「何だよ？」

「つれないなあ。挨拶をしただけだろ？」

こいつの言うことは無視する。
すると

「ちよつとあんた！柳扇君が話しかけてるのに、何か反応ぐらいしなさいよ！」

柳扇の左にいた女子が怒った。

「無駄だって。だってそいつらオタクだもん」

その女子を柳扇の右にいた女子が宥める。

「オタクは誉め言葉だ」

「開き直ってるし。キモいんですけど」

柳扇の後ろにいた女子が言ってくる。

女子は勘違いしてるな。と思い

「1つ教えておいてやる。オタク、と言ってもジャンルは様々だ。

数学、漢字、音楽、武器、アニメ、その他多数」

一息

「オタクを貶すのは自由だが、オタクをバカにするのは止めた方がいい」

柳扇を睨むように見て

「柳扇だって一種のオタクだ。そうだろう？ 学年1位」

「あんた！！」

柳扇の後ろにいた女子に殴りかかれそうになるが

「止めたまえ。証君の言っていることは事実だよ。僕は勉強が大好きですから」

そう言われて、俺に殴りかかろうとした女子は止められた。

「それより、証君」

「今度はなんだ？」

「女子に興味はあるかい？」

「3次元に興味はねえ」

柳扇は意外そうな顔をして

「如月蓮華さん、だったかな？ 彼女にも？」

「もう1度言ってる。3次元に興味はねえ」

「ああ、なるほど。興味があるわけだ」

こいつには屁理屈が通用しないなあ。と思いつつ

「疑問が解けたらとっとと消えろ」

「最後に1つだけ」

「？」

「君とはいつかテスト以外で決着をつけよう。学年同列1位」
それだけ言うのと柳扇は去っていった。

「つか、証。お前、頭良かったんだなあ」

「義の言う通りだ。なんで教えてくれないんだよ？」「いや、お前
ら何にも聞いてこないし、教える必要ないだろ」

ですよねー、と言う返答が帰ってきたとか、こなかったとか。

「でも、全国模試なら柳扇の方が上だよ」

「関係ないだろ！今度、俺に勉強を教えてくれ。義も頼めよ」

「言われなくても！俺にも頼む！」

はいはい、と適当に返事を返した。

5時間目の休み時間。

「証の勉強方法が聞きたい」

「証の自慰方法が聞きたい」

惇と義の声が重なった。

「惇の勉強方法は良いが、義の自慰方法は勘弁してくれ」

義は驚いた顔をする。 何故？

「わざと声を重ねたのに、よく聞き取れたなあ、と」

ああ、そのことか。と納得する。

「俺の部屋にパソコンがあるのは知ってるだろ？」

「ああ。パソコンが3台並べられていたのを見た時はビックリした
わ。なあ、義」

「うん。アレにはビックリしたよお。自作だっけえ？」

「おう。1台1万少々の自作パソコンだ」

誇らしげに胸を張った。

「見たいアニメって、いくつかあるだろ？」

「唐突だよなあ。まあ、あるけどお」

義が肯定する。

「そういう時、パソコン3台を起動させて、3つ同時にアニメを見るわけだ」

「内容が頭に入らねえよ！」

惇が突っ込みを入れてくる。

「いや、そうでもない。初めてやった時は、アニメの内容が頭に入らなかったが、次第に並列思考が鍛えられ、今では問題ない」

並列思考というのは、違う物事を同時に処理する能力のことだ。

例えば、アニメの事を考えながら、ラノベの事を考えるなど。

「授業中に黒板に書かれる事や、先生が言う事を、好きなアニメに書き換えて脳内再生する。これでバッチリ覚えられるぜ！」

「義、俺には無理そうだ」

「奇遇だな惇。俺も丁度そう思っていたところだあ」

現実は一変した。

放課後。

学校の校門に向かうと、1人の女子がいた。

「あ、あの！」

「うん？」

「竜田証君、ですか？」

「ああ、俺だな」

女子は俺の左右を伺う。

「2人には聞かれない内容か？」

「い、いえ」

大きく息を吸い、吐く。

「私、理恵と言います」

「理恵さん、ね」

「それで、ですね」

もう1度大きく息を吸い、吐き出した。

「私、証君の事が好きです！付き合ってください」

「ごめん。俺、3次元には興味ないんだ」

彼女はそれを聞いた瞬間、泣き出して走り去っていった。

「惇、知ってるう？」

「何を？」

「証で、モテるんだよお」

「知ってるよ。今みたいなのをさんざん見てきたからな」

「外見はイケメンだけど、中身が残念だからねえ」

後ろで2人が何か言っているようだが気にしない。

「3次元に”全く”興味がないわけじゃないんだけどなあ」
ボソリと呟いた。

学校（後書き）

微積分の中間テストが終わったよ。

やったね！

嬉しさのあまり、衝動で投稿した。

さて、来週の電気回路の中間テストの勉強でもするか。

人物紹介（前書き）

明らかにっていないことは書いていません。
ただし、明らかにしても問題ないものは別。

詳細が明らかになる度に更新します。

人物紹介

名前

たつだあかし

竜田証

性別

男

一人称

俺

身長

186

特徴

並列思考が出来る

詳細

この物語の主人公。

身体能力は人並みか、少し優れている程度。
頭は良く、記憶力が良い。

成績は、柳扇と同じく学年同列1位である。

しかし、証は教科書に載っている問題しか解かないので、全国模試では柳扇に負ける。

だが、全国模試の間違った問題の正しい解き方を覚えているので、柳扇に追い付くのも時間と回数の問題。

よく女性から告白されるが「俺、3次元に興味はないんだ」と言っ
て断っている。

しかし、3次元に"全く"興味がないわけではない。

如月蓮華には少なからず好意を持っている。

生まれつきで、丁度気管支が通っている辺りの胸がへこんでいる。

このせいで人より息切れが早く、体力の回復速度が遅い。

激しい運動には向かない体になっている。

2次元のヒロインに対して「○○は俺の嫁」というとキレる。

イメージは、生徒会○一存の杉崎と、リト○スの恭介を足して2で割った感じ。

ただし、髪色は黒。

名前

たつだまさし

竜田正

性別

男

身長

189

一人称

私

詳細

証の父親。

それ以上でも、以下でもない。

名前

たつだまさし

竜田正

性別
女

身長
171

一人称
私

詳細
証の母親。

それ以上でも、以外でもない。

名前
角馬敦かくまあつし

性別
男

身長
187

一人称
俺

特徴
身体能力が高い

詳細
証の幼馴染みの1人。
それ以上でも、以下でもない。

名前
はやまだし
羽山義

性別
男

身体

182

一人称
俺

特徴

語尾が小さな母音になる

ただし、人の名前を呼ぶときや語尾が母音で終わる時は、小さな母音にはならない

例…何？↓何い？

買って↓買ってえ

詳細

証の幼馴染みの1人。

それ以上でも、以下でもない。

名前
きささぎ れんげ
如月蓮華

性別
女

身長

173

一人称

私

スリーサイズ

B90 W55 H88

詳細

この物語のヒロインの1人。

如月剣道場の1人娘。

幼少の頃から、剣道一筋で生きていた。今まで蓮華から一本を取れた人間はいない。

才能では言い表せない何かを持っているのは確か。成績は200人中20位と良い。

学校では様々な人から畏怖、恐怖、憧れ、妬みなどの視線が集まっている。

髪は黒髪ロングだが、普段は後髪をツインにしている。

証と初めて出会ったときから、証を守ろうと決意しているもよう。

愛美華でNo.66。

能力は『幻術を現実にする』こと。

物理法則を書き換えたり、死者を蘇らせる事ができるほど。

この作品のなかでも、トップクラスの応用力。

名前

鳳柳扇
おおとゆうせん

性別

男

身体

179

一人称
僕

詳細

成績は証と同じく学年同列1位。
全国模試では証よりも上であるが、
納得がいつていない。
身体能力は証より少し劣る程度。

名前
みずしまうつろ
水嶋虚

性別

女

身長

175

一人称

お姉さん

スリーサイズ

B87 W58 H86

←20話後

B90 W56 H87

詳細

この物語のヒロインの1人。自分ことを『お姉さん』と呼ぶ不思議な女性。髪は淡い青色のショート。

髪が多く、外に髪がはねている。愛美華でNo. 18。能力は『液体を操る』こと。

液体であるなら成分に限らず、何であれ操る事が出来る。

名前

あけみかすみ
暁美霞

性別

女

身長

171

一人称

私

スリーサイズ

B75 W57 H71

詳細

この物語のヒロインの1人。

髪はストレートのロングヘア。

髪色は黒に近い灰色。

No. 12の愛美華。

能力は『虚数を操る』ことである。

現実の実数で表せる世界。

虚数は存在しない。

しかし、現実の正の世界があるなら、負の世界もあるはずだ。という考えがされる事がある。

つまり、虚数だけで表せる世界である。

その世界は、さきほども述べたが負の世界。

つまり『虚数を操る』というのを、他の言葉に置き換えるならば『負の感情を操る』こと。

もっと詳しく言うなら『負の感情を具現化し操る』ことである。

能力を使用すると、性格が能力に引っ張られ病んでしまう。

俗に言う『ヤンデレ』になる。

名前

こまつ さな

小松小菜

性別

女

一人称

僕

身長

139

スリーサイズ

B88

W53

H74

詳細

僕っ娘。

ロリ巨乳。

などの言葉が当てはまる女性。

もちろん、ヒロインの1人。

言葉を途切れ途切れに話す。

能力は『重力を操る』こと。

万有引力と言った方がいいかもしれない。

帰り道（前書き）

半歩ほど非日常に近づきます。
近づくだけで、もう少し日常回が続きます。

帰り道

いつもの帰り道。

俺たちはたわいのない話をしながら帰っていた。

「俺たちは3年だし、進路をどうするか決めないとな」

「証、俺たちは普通科の高校生だぜ？進学安定だろ」

「敦の言う通りだよお。悩む必要はないと思う」

俺は、2人の言葉に呆れた様子で

「あのなあ、進学するにしても、何処の大学のどんな学科に入るかを決めないといけないだろ」

「普通科でいいだろ」

「よくない。今の時代、そんなんじゃ生きていけないぜ？ 高学歴でもない限りはな」

「じゃあ、工業系の学科がいいのお？」

俺は少し考えてから発言する。

「悪くはないよ。でも、資格を取らなきゃいけないぞ？」

「そっかあ」

機械の資格なら、普通旋盤やフライス盤がある。

電気電子なら、電気工事士や電気主任技術者。

情報なら、ITパスポートや基本情報技術者は持っておきたい。

そんな話をしていると、大きな公園の手前まで来ていた。

大きな公園の手前には十字路があり、真っ直ぐ行くと俺の家。

右折すると敦や義の家だ。

「また明日な」

そう言って、何時ものように別れた。

少し歩くと公園の入り口が見えてきた。

誰かいるかな？という気持ちで公園の中を覗いてみる。

そこには、元気に遊ぶ子供がいたわけではなく、近所の老人がベンチに座っているわけでもなかった。

そこに居たのは、黒色のドレスを着た美しい女性だった。

ドクンッ

心臓が高鳴る。

別に恋をしたから、心臓が高鳴ったわけではない。

この心臓の高鳴りは、恐怖から来るものだった。

美しい。

ただ、純粹に美しい。

全てを魅了するような、魔性の美しさ。

だが、それが恐ろしい。

ここまで美しい人がいるものなのか？と自問してしまう。

女性と目が合う。

ドクンッ ドクンッ

より鼓動が高鳴り、速くなる。

ここから一刻も早く立ち去らなければ。

そう思っているのに、足が動いてくれない。

理性が動きを縛り付けている。

女性は軽く微笑み、手招きをする。

自然と足が女性の方へと向かう。

1歩1歩着実に、女性の元へと歩み寄っていく。そして、ついに女性の元にたどり着いた。

「立っていては疲れるでしょう？　どうぞ座って」

女性は自分の右側にスペースを空け、そこに座るように促す。

「失礼します」

自然とそんな言葉が出た。

心臓は激しく高鳴り、背中からは冷や汗が出てくる。

「顔色が優れませんよ？　何処か具合でも悪いのですか？」

「そうかもしれません」

「それは大変！　横になってください。膝を貸して差し上げますから」

女性は自分の膝を叩く。

「お邪魔します」

体が自然に動いた。

後頭部に柔らかい感触が広がる。

下から見上げる女性もまた、一段と魔性的に見えた。

「少しは楽になりましたか？」

「はい」

嘘だ。

楽になるはずがない。

「それはよかった」

優しく頭を撫でられた。

鼓動が速くなる。

まるで、血が沸騰しているかのように、体が熱くなる。

体は拒絶しているのに、理性が女性を求めている。

「ねえ」

「何ですか？」

改まったしゃべり方になってしまう。

「私を抱いてくれない？」

一瞬、意識が飛びそうになるが、何とか気合いで持ち直す。

「……どういう意味ですか？」

「それを女性に言わせるの？」

理性が女性の体を求めているのは事実だ。

しかし、今俺がこの女性を抱けば死ぬ。

人間的な意味で、だ。

恐らく、この女性を抱き続けるマシンのようになってしまう。

だから俺は

「断る」

「へえ……」

女性は、嬉しそうな笑みを浮かべた。

「いいわね、あなた。今ここで、あなたを私のモノにするのは簡単だけど、それじゃあつまらない」

だから

「待ってあげる。あなたが育つのを。強くなるのを。その時、また誘ってあげるわ。全力でね」

それだけ言うと、女性は初めから居なかったかのように消えてしまった。

「なんだったんだ？」

その答えを返してくれる者など居ない。

帰り道（後書き）

後々の事を考えて発言させるのは難しい。

伏線を張るのも難しい。

回収するのも難しい。

リアルなテストも難しい。

誰か助けて！

夜（前書き）

気づいたら小説を書き上げていた。
だから投稿する。

勉強しないとなあ。

夜

公園から家に帰った後、俺は自分の部屋で寝転がっていた。
何をするわけでもない。

ふと、公園であつた事を思い出す。
体が震えた。

まだ、恐怖している。

公園で出会った美女に。

「クソッ！」

死とは違う恐怖。

美しい事が恐怖に繋がるとは思ってもみなかった。
忘れるために目を瞑る。

思考を停止する。

……

……

…

ゆさゆさと体が揺すられる。

「うゝ。ん？」

「夕飯が出来たわよ。降りていらっしやい」

「……ありがとう」

「どういたしまして。早く降りてくるのよ」

そう言つて俺の部屋から出ていった。

俺は、これからの事を頭で一旦考えてから、下に降りていった。

階段を降り、ダイニングへと向かう為に左に曲がる。

その時、ガツンッと左足の小指をぶつける。

「ぐおおおお！？左足の小指をぶつけたあああ！」

痛そうにのたうち回る。

「ちょっと、大丈夫なの？ 証」

「大丈夫じゃない。今のでテンション急降下だよ！」

「元気出しなさい。人間、そんなときもあるわよ」

母さんが励ましてくれる。

おかげで元気が出てきた。

「うん。ありがとう母さん」

先ほど、小指をぶつけ、のたうち回ったのは演技だ。

やはり、元気がない時に、違う事で励ましてもらっても元気になるものだ。

その後は2人で食事をした。

夕食が食べ終わったとき、ちょうど父さんが帰ってきた。

「ただいま。 証、証」

「お帰りなさい、正さん」

「お帰り、父さん」

「ん？ 証、少し元気ないな」

父さんには、俺が元気ではない事が分かるんだ、と内心少し驚いた。

「実は、2階から降りてきた時に、左足の小指をぶつけちゃって」

母さんが事情を説明してくれる。

母さんは、俺の元気がない原因が、小指をぶつけた事にあると思っている。

母さんには悪い事をしたな、と反省する。

「……そうか」

納得した素振りを見せ、椅子に座る。

いただきます、と言って夕食を食べ始めた。

「俺、もう寝るわ」

「お風呂は？」

「今日は入らない。気分じゃないんだ」

それだけ言うと2階に上がる。

自分の部屋に入ると、すぐにベッドで横になり、目を閉じる。
それが今日の1日だった。

暗闇に紛れ、何かが木の枝の上に居た。

陰が動く。

青白い淡い光を発する蝶が生まれた。

淡い光が手のようなものを浮かび上がらせる。
はつきりとは分からない。

また、青白い淡い光の蝶が生まれた。
1匹。

また1匹と増える。

そして、10匹の蝶が生み出された。
そこで蝶を出すのを止める。

しかし、青白い淡い光は、確かに女性を浮かび出していた。
「半月もすれば始まるかしら？」

何が、は言わない。

「アナタはどう思う？」

暗闇に紛れたもう1人に問いかけた。

「間違いなく始まるわ」

声が弾んでいた。

「嬉しそうね？ いい事でもあったのかしら？」

「ええ、面白い子を見つけたの」
でもね

「その子の成長を妨げるようなら殺すわよ？」

その言葉を聞いた女性は、クスッと笑う。

「面白いことを言うのね。今回、私以上に殺しに向いた愛美華はいないのに」

「ああ。あなたN.O. 4だったわね」

ええ、と頷く。

続けて

「始まる前に殺すのはルール違反だから、殺さないであげる」

「それは私のセリフよ」

しかし、それにしても

「何もかも、分かったような口調ね」

「分かるわよ」

運命も、破壊も、死も、何もかもが

「私の虜だもの」

暗闇に紛れていた者はそれだけ言うと、その場から消えた。
始まりはまだ遠い。

夜（後書き）

裏では日常が消えています。

それが表に来たとき、本編が始まる。

学校2（前書き）

投稿だあ！

いつのまにかユニークが100人突破。
嬉しいけど、プレッシャーがかかるわ。

話を変えるけど、誤字、脱字報告が来ないな。
ハッ！（。ロ。）

まさか、ありすぎて報告するのも面倒なのか？

ついでに言うなら、方言が混じってないかも心配だ。
では、どうぞ！

学校2

6月14日火曜日

昼休みの出来事だ。

俺たちは食堂で昼食を取り、早々教室へと戻ってきた。
するとそこに

「竜田証殿は居られるか？」

1人の男が来た。こいつからは俺たちと同じような匂いがする。

「俺が証だ」

そう言いながら、俺の机と義の机（右隣）を合わせた。

「まあ座れ」

「かたじけない」

机の上に肘をつき、目の前で手を組む。

「要件を聞こう」

「証殿はオタクと聞いた」

「まあ、そうだな」

「そこで私も語り合いたいと思い、ここまで足を運んだのだ」

俺は「なるほど」と頷き

「では始めに、どんなジャンルのアニメが好きだ？」

「恋愛系ですな。恋愛が入っているなら、ギャグ、ロボットなど、
ジャンルは問いませぬ」

俺の後ろでは

「すげえ。どこかの会社の面接みたいだあ」

その義の言葉に対して惇は

「こんな会社は嫌だな」と呟いていた。

「なら、好きなキャラは？ 複数回答可だ」

「そうですね。……有名どころでいうと、CLONADなら智代、
東鳩2ならささら、といった具合ですな」

「おお！俺もその2人は好きだぞ！」

ここまではよかった。なんの問題もなかった。

普通に意気投合していただけた。

ただ、この後の発言がいけなかった。

「智代やささらは俺の嫁、ですな」

「……ざけんな」

「え？」

「ふざけんな、て言ってるんだよ！」ひい、と男は後退りした。

「わ、分かりました。その2人は証殿の嫁ということで」

「そういうことを言ってるんじゃないんだよ！」

これはあくまで俺の考え方。他人に押し付ける気はない。

ただ、俺に対する禁句を見逃す訳にはいかない。

「いいか。恋愛系の物語には主人公とヒロインがいる」

主人公は男だったり、女だったり、複数の場合だってあるかもしれない。

それはヒロインにも言えたことだ。

「主人公とヒロインは基本的に結ばれる」

結ばれた後が大変だったりする作品もあるが

「もちろん互いに愛し合っている。主人公やヒロインを幸せに出来るのは、その人が好きになった人だけだ」

しかし

「俺たち（男性）がヒロイン（女性）を好きになったところで片想い」

俺たちはヒロインが好きだが、ヒロインは主人公が好き。

主人公はヒロインが好き。

「さっきもいったが、互いに愛し合っていなければ、相手を幸せには出来ない」

付き合ったとしても、ヒロインを不幸にするだけ。悲しませるだけだ。

だから

「俺は、主人公とヒロインを応援する人間になろうと決めた」
なぜなら

「俺はヒロインが好きだから。俺が好きな人に幸せになってもらうために、俺は恋を捨てる」

ただ、好きだったという気持ちだけはとどめておくがな。と呟いた。

「熱くなって悪かったな。一先ず、今日のところは帰ってくれ」
「わかった」

男は素早く教室を出ていった。

「熱くなり過ぎたな。頭を冷やすとしよう」
机を元の位置に戻す。そして、机に顔を伏せて寝ることにした。

放課後

「まだ、蓮華は教室にいるかな？」

「居るんじゃないか？放課後も始まったばかりだし」

「敦と同じで、俺もそう思う」

2人の推測を聞き、そうだよなあ、と呟く。

3年2組に向けて歩き出した。

3年2組の教室に着くと

「たのもー」

「それは違うだろ、証」

「敦、証に言っても無駄だと思うよお」

そんな事を言いながら教室に入った。

蓮華は荷物をまとめているところだった。

「話せる時間あるか？」

「……」

蓮華は顔をしかめた。

しかし、すぐに驚いた表情に変わる。

「分かりました。私も聞きたい事が出来たので」
意味ありげな事を言ってくる。

「俺は、たいした話じゃないし、蓮華からどうぞ」

「では、昨日女性と出会いましたね？」

ドクンッ

心臓が高鳴る。

昨日の恐怖が思い出される。

「それはどんな女性でしたか？」

昨日の女性は脳裏にやきついている。

嫌でも、詳細に思い出せる。

「第一印象は、美しかったよ。ただ、純粹に美しかった。あそこまで美しい女性がいるものなのか？と思ったよ」

それを聞いた蓮華は

「まさか……でも、そんなハズは……」

と呟いていた。

そして、コホンッとか払いをし

「その女性は黒いドレスを着ていましたか？」

「そうだけど、よくわかったな？ 知ってるのか？」

「風の噂で聞いたことがあるだけです」

それだけ答えると、早々と教科書を鞆の中に入れ

「証さんの話は、また今度でいいですか？」

「いいぞ？ 調子はどうだ？ て聞くつもりだったただけだし」

「元気です。ですが、焦ってもいます。ではまた」

それだけ言うと教室から出ていった。

「あれ？ 戸締まりは？」

「俺たちでするしかねえな」

「手伝うよお」

3人で戸締まりを確認し、鍵は職員室に返した。

夜

暗闇を1つの陰が駆けていた。

「まさか、あの愛美華がこの町に来ていたとは」
もし、証の話が本当なら、あの愛美華は、この町で契約者を見つけ
るつもりなのだろうか？

いや、既に契約している可能性もある。
私のように。

「証さんには、許可なく契約を結びましたから、時が来れば教えな
いと」

そうは言うものの、私が結んだのは仮契約。

証が拒絶を示すようなら、契約は破棄すると決めている。

「しかし、どこに」

「誰を探しているのかしら？」

後ろから楽しそうな声が聞こえた。

素早く後ろを振り向き、迎撃に備えて構える。

「構える必要はないわ。攻撃する気なんてないし」

その言葉を信じるほど、私は相手を信じていない。

「まあいいわ。それで？ 私に用があったんじゃないかしら？」

「昨日、アナタは1人の男性と出会ったハズです」

「ああ、あの面白い子のことね？」

「面白いかどうかは別として、その人に触れないでください」

「へえ？ なんで？」

暗闇で相手の顔は見えないが、ニヤニヤしていることが想像できる。

「私が仮契約を結んだからです」

「そう」

「ですから」

「でも、私は諦める気はないわ。全力ではないとはいえ、私の誘い
を断ったのは彼が初めてだもの」

それを聞いた瞬間、私は手に刀を持っていた。

「No. 66、如月蓮華。行きます！」

地面を駆ける。

音速を越える速度で相手に迫る！

しかし、

「だから、戦う気はないのよ。私は」

刀が当たる数センチのところまで止められていた。まるで、見えない壁でもあるようにだ。

「クッ!？」

すぐに相手との距離をとる。

そこで

「今宵はここまでにしましょう」

逃げられてしまった。

周辺を気で探っては見るが、見つからない。

仕方なく刀を消した。

「証さんは、私が守らないと」

証と初めて出会った公園で、決意した誓いを。

証を守るといふ誓いを、改めて誓った。

休日（前書き）

溢れ出るフラグ。

上手く回収できるかな？

ではどうぞ！

休日

6月18日土曜日

時間が経つのは早い。

特に休日の時間は特に早く感じる。

そんな事を考えている俺は、今商店街前まで来ていた。

理由は、母さんにお使いを頼まれたからだ。

買い物袋を右腕に下げ、買ってきて欲しい物が書かれた紙を見ながら歩く。

「えーと、ニンジン、玉ねぎ、牛肉、リンゴ、牛乳、ジャガイモ、チョコ、カレー粉。……夕飯はカレーか」

紙を見て歩いていたせいにか、ドンツと、誰かとぶつかってしまった。

「キャッ!?!」

声は女性のモノだった。

「すみません」

顔を上げると、女性が尻餅をついていた。

ただ、女性はスカートを来ていたらしく、そこからパンツがチラッと見える。

黒色!と一瞬で脳内保存。

そして

「すみません。お怪我はありませんか?」

俺自身に、お前誰だ!?!と突っ込みたくなるほど、普段の俺とは態度が違っていた。

「うん、大丈夫。お姉さんにケガはないよ」

そう言って俺の手を掴み、立ち上がる。

しかし、自分の事を『お姉さん』と呼ぶのは珍しい。

「ねえ」

「はい、何でしょうか?」

「私のパンツ見たでしょ？」

俺は内心驚いたが、冷静を装い

「いえ、まったく」

「それダウト」

「何故ですか？」

「だって、倒れる際に、パンツがチラツと見えるように倒れたもん」
俺はその言葉にフリーズしてしまう。そして

「謀ったなあ!？」

「あつ、やっぱり見たんだ」

「さっきのは嘘か!？」

「うん」

この女性、出来る!

ついでに、嘘だと判ったのは『あつ』という言葉である。

「君、面白いね。名前は？」

「竜田証。アナタは？」

「お姉さんは、水嶋虚みずしまつろだよ。呼び方は虚でいいよ」

「では、虚と呼ばせていただきます」

うんうん、と満足そうに頷く。

「じゃあ、お姉さんは証君と呼ばせてもらうわ」

「光栄です!」

俺は思わず虚の手を握ってしまう。

「す、すみません」

「いわよ、握っても。でも、丁寧に話すのは止めなさい」

「分かった」

言われた通り、丁寧に話すのを止める。

そして再び虚の手を握った。

「うーん、お姉さんが握ってもいいって言ったのは手じゃなくて」
そう言って俺の手を取り

「胸だったりするのよねえ」

自分の豊満な胸に、俺の手を押し付けた。

思わず胸を握ってしまう（揉んでしまう）。

回りから見れば俺は変態か、痴漢、もしくは両方に見えるだろう。

しかし、幸か不幸か回りに人間はいない。

これは、出来る！

思い立ったら即行動。

ルパンダイブを実行した。

しかし、虚は俺の後ろに回り込み、自分の豊満な胸を俺の背中に押しつけるような形で固めてきた。

「いででで。キブアップ」

「急にお姉さんに襲いかかってくる人にはお仕置きだ！」

さらに力が込められる。

「イク。イッちゃうー（二重の意味で）」

その後、すぐに俺は果てた。

「いやあ、楽しかったわ」

「1人で楽しんだような気が」

「ダメ？」

下から覗き込むように涙目で見てきた。

さらに、服から豊満な胸の谷間が見える。

「可愛いから許す！」

思わず声に出してしまった。

「ありがとう。じゃあ、お姉さんは行くね？」

縁があればまた会い

ましょう」

そう言い、駆け足で何処かに行ってしまった。

まるで台風のような人だった。

俺はその後、商店街で無事に買い物を済ませ、家に帰った。

「お姉さんは逃げたりしないから、出てきなさい」

お姉さんが証君から駆け足で離れたのは、ただならぬ殺気を感じたから。

証君を巻き込むわけにはいかない。

そして、出てきたのは

「随分、仲が良いんですね！」

如月蓮華。そして

「まったくよ。本当に一瞬だけ、殺意が芽生えてしまったわ」
美しい女性が風のように現れる。

「っ！」

「！？」

蓮華と虚は女性の声が出た方に向き、互いに構える。

しかし

「羨ましいいわ。私も、彼をおもちやのように扱ってみたいわ」
見惚れてしまった。

その女性の美しさに。

あまりにも魔性的な外見に。

外見は噂で聞いていた。

アレが今回、優勝候補筆頭にして最強の愛美華。

黒いロングヘアは全てを魅了し、黒のドレスとは対称的な白い肌は全てを狂わし、ルビーのような赤い瞳は全てを従える。

「いずれは、あんな奴と戦わないといけないのね。お姉さん、泣きそう」

「それは同感です」

2人で1人を見据える。

「今は戦う時ではないわ。いずれ、また会いましょう」
女性は今もなく消えた。

「お姉さんも帰ろう、と」

「……」

蓮華は何も言わずに見送った。

まだ、戦いは始まらない。

歪む日常（前書き）

この作品の設定を話します。

理解できるように書いたつもりです。

分からない場合は、小説を読み進めて分かるようになるか、作者に質問を送ってきて下さい。

歪む日常

7月2日土曜日

半月ほど時が経った。

特別な事は起こらなかった。

いつものように幼馴染みと話し、可笑しな毎日を過ごしていた。

「風が気持ち良いな」

そんな物思いに耽っていた俺は、川の近くに来ていた。

風が優しく頬をなでる。

夏だというのに、今日は涼しい気温だった。

こういう日もあるだろう。と1人で納得する。

その時

「あの、すみません。ちょっとお話いいですか？」

「ん？」

そこに居たのは女性。

蓮華や虚をグラマーというなら、この女性はスレンダーだった。

「いきなり、こんな事をいうのも何なんですが……」

「うん」

「もしかしたら、自分が死ぬかもしれない。でも、生き残れば何でも望みが叶う戦いに巻き込まれたら、アナタはどうしますか？」

「えーと、創作の小説を考えているのかな？」

女性は横に首をふり

「私は真剣です」

「そう……」

「そしてアナタは今、その戦いに巻き込まれそうになっている」
言葉は真剣で、まっすぐ俺を見ている。

目は純粹で、嘘を言っているようには見えない。

「とりあえず、場所を移動しよう。ここで話してたら、人に聞かれるかもしれない」

「……わかりました」

「ついて来てくれ」

女性は俺の後ろをついて来た。

そして俺が案内したのは、俺の家だった。ここなら、聞かれるとしても両親だけだ。

そして、その両親は今、出かけている。

俺はポケットから鍵を取りだし、ドアを開ける。

「どうぞ。中に入って」

「お邪魔します」

中に入った後、内側からドアに鍵をする。

「2階に上がってすぐ左が俺の部屋だから、そこで待ってて」

「わかりました」

俺は冷蔵庫の中から麦茶を取りだし、コップに注ぐ。それを持って俺は2階に上がった。

「お待たせ。はい」

「ありがとう」

俺は麦茶を女性に渡し、床に座る。

「まずは、自己紹介からでいいかな？」

「あ、はい！」

「俺は、竜田証」

「私は、あけみかすみ暁美霞です」

やっと霞の名前が分かった。

名前が分からないと呼びづらい。

「まずは、何が起ころうとしているのか説明してくれ」

「優しく言えば戦い。酷く言えば殺し合いです」

最初に言っていたな。

死ぬかもしれない、と。

その時点で、ある程度予想はしていた。

「どういった経緯で？」

「それを話すには、私たちの事を説明しないと」

「私”たち”？ まあ、話してくれ」

「分かりました。私たちは『愛美華』^{まびか}と呼ばれる存在です」
初めて聞く言葉だ。

「そして、愛美華には女性しかいません」

女性だけ、か。

「その愛美華の目的は、子を産むことです」

「は？」

思わず、そんな声が出た。

とりあえず、黙って最後まで聞こう。

「先ほど言ったように、愛美華には女性しかいません。ならば、目的のために、男性の居る星に行かなければなりません」

そりゃ、ね。

しかし

「星？ 違う場所から来た言い方だな」

「はい。私たちは『魔禍』^{まか}と呼ばれる場所から来ました。イメージは、地獄が近いと思います」

なるほど。

異世界のようなものか。

「話を戻します」

コホンッと咳払いをする。「私たちとしては、強く、美しく、華やかな子を産みたい」

母親の願いみたいなものだろうか？

「だからこそ、私たちは戦う」

「え？ 話が繋がらないような」

「分かっています。とりあえず、聞いてください」

なんだか、悪い事をしたような気がした。

「愛美華の子、つまり愛美華は、母親の強さ、美しさ、華やかさが遺伝します」

つまり、蛙の子は蛙のように、愛美華の子は愛美華なのか。

「そして、愛美華は人と交われれば交わるほど、愛美華と人との愛が深いほど、強く、美しく、華やかになる存在です」

一呼吸おき

「そして、子を産める権利を与えられるのは、最後まで生き残った愛美華のみ」

つまり

「愛美華と人が交わり、その愛が深い1組が勝つ。そういう戦いなんですよ」

なるほど。本筋が見えてきた。

「ここまでで、何か質問は？」

「1組と言ってたけど、人1人に愛美華1人でいいのか？」

「そうですね。基本的に人1人に愛美華1人です」
なるほど、と頷く。

「じゃあ、戦いが始まれば、愛美華を殺さないといけないのか？」

「それは、手段の1つです」

「じゃあ、他に方法があるのか？」

「もう1つだけ、方法があります」

強く答えた。

「見てください」

そう言って顎を上げ、顎の下を指差す。

12という数字が浮かび上がっていた。

「愛美華には、必ず体のどこかに、このような数字が浮かび上がっています。これを消しても、脱落させる事が出来ます」

女性の血を見るのは嫌だから、違う方法があって助かった。

「そして、この番号の下1桁は、その愛美華が持つ能力の本質を表します」

「能力の本質？」

「はい。例えば、私の下1桁の2という数字。これは、未知や存在しないことを表します」

未知や存在しない、か。

「で、霞の能力は？」

「私は、虚数を操る能力です」
虚数。

人の頭の中だけに存在する、現実には存在しない数。

数学でも、虚数というのは、あったら計算が便利になる道具に過ぎない。

「そして、1桁とゾロ目の数を持つ、愛美華には気をつけなければなりません」
なぜなら

「数1桁の愛美華の能力は、あまりにも本質に近い。故に強力。いや、最強と言った方がいいでしょう」
間違いなく、そんなじょそこのバトル物語なら無双できます。
そう付け加えた。

「ゾロ目数を持った愛美華は、数1桁の愛美華の能力より本質は遠いが、最強レベルの能力を持っています」
だから

「数1桁とゾロ目数を持つ愛美華との戦いは、避けた方がいいです」
いずれは戦うことになりますが、と呟っていた。

「もし、愛美華が10人いたとする。そして、10人とも未知や存在しないことに近い能力を持っていたとしよう。そうすれば、10人とも下1桁は2になるのか？」

「はい、もちろんです」
だけど

「愛美華が10人ということはないです。1人の愛美華が産む子の数は1000〜10000ですから」
その数にフリーズしてしまう。

「そんなに、どうやって産むんだよ!？」

「時間をかけて、です。愛美華は約800年は生きますから」
桁が違い過ぎる。

本当にファンタジーだな、と思った。

「どこで戦うんだよ？」

「日本です。と言っても、現実ではなく結界の中ですが」

「結界？」

「はい。不定期に結界が日本全土に張られます。その中でのみ、戦闘が許されています」

「もし、ルールを破れば？」

「脱落で強制帰還です」

「そうか」

「もう少し、詳しいルールを説明します」

「ああ」

「戦いが始まるまでに、契約を結んでいないと脱落」一息

「もし、戦いが始まり、人間が契約破棄や死んでしまった場合、愛美華には3日の有余を与えられる」

「それまでに契約を結び直さないと脱落、か」

「はい。あと、ルールはこれくらいです」

なるほどなあ、と納得する。

「結界内だと、被害が現実に来ないのか？」

「はい。ですが、その結界を破壊するような能力があれば違ってきます」

「それはルール違反じゃないのか？」

「はい。結界内からの攻撃なので許されます」

そんな能力持ちに出会わない事を、出来ればいいことを願おう。

「最後まで生き残って願う願い事は、本当に何でも叶うのか？」

「神になりたい！や、別宇宙を全て征服したい！などでなければ」
神は全知全能だし、結果的に複数の願い事を叶える事になるからだろう。

別宇宙を全て征服も、神にでもならない限りは無理そうだからな。
つまり、結果的に神になる願い事は無理か。

「まあ、不老不死、億万長者、死者蘇生なんかは出来るますから、

余程の願い事でもない限りは大丈夫です」

「だろうな」

少しの沈黙。

そして

「今すぐ答えが欲しいわけではありません。私の予想では、戦い開始まで1週間＋αほどあります。ですから、1週間の時間を差し上げます。それまでに答えを出していただければ幸いです」
では、と言って部屋を出ていった。

俺は1人、部屋で座っていた。

歪む日常（後書き）

ご理解いただけたでしょうか？

こんな設定ですから、マジでR18描写されます。

不愉快だと思った方は読まない方がいいです。

読む読まないは本人の意思なので、強制はしません。
では次回！

学校3（前書き）

後書きに、能力の募集を書いています。

学校3

7月4日月曜日

「ちょっと話があるんだ」

昼休みに、俺は幼馴染みの2人に話しかけた。

「なんだよ？ あらたまって？」

「何かあったのお？」

「んー。まあ、な」

俺にしては、歯切れが悪いと感じたのだろう。

真剣な表情に切り替わった。

「ここじゃ話しづらい。屋上でいいか？」

2人は黙って頷く。

俺は良い幼馴染みに出会えたと、改めて思った。

屋上

「生き残りをかけた殺し合いがあったでしょう」

これはあくまで、仮定の話だ。

「最後まで生き残れば、神様になりたい！という願い以外なら、なんだろうと叶えられる」

ならば

「敦と義は参加するか？」

「しないな」

「しないねえ」

即答する。

「何故？」

「命を懸けてまで叶えたい願いなんて、持ち合わせてない」
「敦に同じい」

うん。まあ、予想はしていたさ。

「証はどうなんだよ？」

「俺は」

あるとも言えるし、ないとも言える。

はつきりしていない。

しかし

「俺は、条件を満たせば参加してもいいと考えてる」

これは、俺の確認忘れだ。

だから、ある事を確認しなければならない。

「命を懸けてまで叶えたいモノがあるのか!？」

驚いたように敦が言う。

「ぶっちゃけ、願いは俺のわがままさ」

でも

「そのわがままが、俺の命を懸けるのに値する」

俺はそう確信している。

「話は以上だ。悪かったな、付き合わせて」

俺は早々と屋上を立ち去った。

放課後

「証君、お客さんだよ」

「客？」

クラス的女子が、俺に客が来ていると言う。

さて？ 誰だろうか？

廊下にでる。

そこに居たのは

「こ、こ、こんにちは、証さん」

蓮華だった。

何の用だろう？

「珍しいな。俺の教室に来るなんて」

「そう、ですね」

齒切れが悪いな。

まるで、悪い事を隠しているような表情だ。

「ここでは話しづらいので、屋上に来て下さい」

「分かった」

蓮華の後について、屋上に向かう。

しかし今日は、屋上に来る事が多いな。

屋上

「話って何？」

「えーと、それは」

ぶつぶつと何かを言い出した。

「落ちついて」

「は、はい」

スーッ、ハーと、大きく息をした。

「証さん」

「何？」

「今まで、隠していたことがあるんです」

何だろうか？

「私は、証さんと初めて出会った時、ある仮契約を結びました」

仮契約？

「私と証さんがパートナーになり、ある戦いに参加するための仮契約です」

まさか！？

「蓮華は、愛美華なのか？」

「その単語をどこで！？」

「蓮華と同じ愛美華だ。分かってるだろ？」

蓮華は沈黙する。

少しして

「返事は？」

「まだだよ。今週の土曜に返事を聞きにくるらしい」

蓮華は再び沈黙した。

「質問いいか？」

「構いません」

「何で俺なんだ？」

10秒ほど時間をおき

「分かりません」

弱々しく答えた。

「ですが、初めて証さんと見たとき、この人だ！と思いました」
直感というヤツだろう。

「契約を破棄したらどうするつもりだ？」

「どうもしません。私は、証さん以外と契約を結ぶ気はありません」
つまり、戦いを放棄するのか？

「でも、愛美華は子を産むために、この星に来たんだろ？」

「そうです。愛美華にとって子を産むということは、どんな願いよりも叶えたい願いなんです」

「だったら」

「嫌です！私は証さんと決めました！証さん以外にあり得ません！」

蓮華は涙していた。

「もし、最後まで勝ち残ったとして、その後はどうなるんだ？」

「『魔禍』に帰りますよ。子を産み、育てるために」

蓮華はとても悲しそうだった。

「決めた」

「え？」

「俺は、この戦いに参加する！」

強く宣言する。

「今度は証さんの意思で、私を抱きしめてください。それで契約は完了です」

「俺、綺麗な女性や可愛い女性がいたら、目で追うぞ？」

「知ってます」

「俺、浮気するかもしれないぞ？」

「しないほうが、証さんらしくないです」

その言い方は、ちよつと傷つく。

「許します。目移りも、浮気も」

「ははっ」

苦笑しか出なかった。

「これからよろしく頼む」

「はい。よろしくお願いします」

俺は優しく蓮華を抱きしめた。

ここに契約は成立した。

………

………

…

「しかし、霞には悪いことしたな」

「霞？」

「俺に、この戦いの説明をしてくれた愛美華だよ」

蓮華は『ああ』と頷いた。

「悪い事というの？」

「ほら、人間1人に愛美華1人だろ？先に『契約して欲しい』と言われておいて、蓮華と契約しちゃったから」

「本当に、霞という愛美華は、人間1人に愛美華1人と言ったのですか？」

よく思い返す。

確かあの時『“基本的に”人間1人に愛美華1人』と言っていた。まさか！？

「証さん。気づいたようなので言いますが、証さんは例外の1人で

す」

つまり、複数の愛美華と契約を交わせると？

「ちなみに、後何人ぐらいいける？」

「私の感覚が正しければ、9人ほど」

「ハーレムが実現可能じゃねえか！」

思わずガッツポーズをしてしまった。

「ふふっ」

蓮華は困ったように笑う。

「あ、後蓮華のN.O.と能力は？」

「N.O.は66で、能力はお楽しみということぞ」

ゾロ目の数ということは

「最強クラスの能力持ち！？」

「たいしたものじゃありませんよ」

きつと、蓮華の能力が明かされたとき、俺はこうだろう。

『チート能力だ！』と。

学校3（後書き）

蓮華の能力はチート。

『こんな能力だしてほしい！』と言うものがあれば、感想に書いて送ってきてください。

チートな能力でもOK

いざというときは、そいつの番号1桁やゼロ目の数にする（キリッ

チートの例え。

惑星破壊

今の時点で、敵キャラとして出ることが99%確定している（笑）
まあ、そいつの能力は、宇宙破壊レベルだけだね。
それでも、そのキャラが勝ち残るのは不可能。
マジだよ？

送る場合は感想に

キャラ名

能力名

能力の詳細

は必ず入れて下さい。

性格

容姿

などは、希望があればどうぞ！

無い場合は、こちらで決めます。

話し合い（前書き）

能力募集〆切は11月末までです。
ではどうぞ！

話し合い

7月9日土曜日

「母さん」

「何？」

「今日、友だちが来るから」

「敦君と義君？」

俺は首を横にふり

「蓮華だよ。あと、霞っていう子」

「証はいつの間に、女性を2人も家に連れ込むようになったのかしら？」

母さんは楽しそうに言っていた。

間違いなく、からかっているな。

だから、俺もからかうように

「今日からだろ」

「あら、まあ」

母さんは、懐かしそうに笑う。

父さんと似たような事があったのだろうか？

その時、家のインターホンが鳴った。

「来たかな？」

玄関を開けると霞が立っていた。

「上がって」

「お邪魔します」

2階に上がるためには、嫌でもリビングを通過しなくてはならない。ということとは、必然的に母さんの目にも止まる事になる。

「貴女が霞さん？」

「はい。証君のお母さんですか？」

「いいえ、お姉さんです」

「嘘をつくな!」

俺が素早くツツコミを入れる。

「いいじゃない、別に」

「ダメだ」

もう、しょうがないわね、と呟き

「証の母、竜田柊です。よろしくね、霞さん」

「証君から紹介があったかもしれませんが、暁美霞です。よろしく
お願いします」

霞と母さんが挨拶を交わした。

「2階に上がろう」

「はい」

自室

「くつろいでいってね」

「母さんが言わないでくれ」

霞は、フフツと笑い

「お言葉に甘えて」

「はい。ごゆっくり」

母さんはそれだけ言うのと部屋から出ていった。

1分ほど経ち、ドアを開けて母さんが居ないかを確認する。

ドアを閉め、床に座る。

「早速本題に入ろうか?」

「はい」

「契約するか、否か、だったな?」

「……はい」

霞は、不安な顔つきになる。

ダメだな。

可愛い顔をしてるのに。

「そんな不安な顔をするな。俺が悲しくなっちまう」

俺は、優しく霞の頭を撫でた。

霞の顔が赤くなり、俯いてしまう。

可愛い！と叫びたくなるが、俺は自重した。

「俺は霞と契約する」

「……本当に？」

「ああ」

優しく微笑む。

「すぐ個人的な願い事があるんだ。それをどうしても叶えたい」

「そのために？」

「まあな」

霞の顔が悲しみに染まる。

俺は『でも』と続けた

「その願い事を叶えるためには、霞である必要がある」

「え？」

「本当だぞ？他の誰でもない。暁美霞でなければならない。じゃな

いと、俺は最後まで勝ち残ったとしても、願いを叶えられない」

これは偽りのない、俺の本心だ。

「霞はいいのか？ ……俺は、可愛い女性や綺麗な女性を目移りし

たり、浮気するかもしれないぞ？ それでいいのか？」

「構いません。それが証君の有りのままなら」

そっか、と呟く。

「契約をしようか？ 何をすればいい？」

「握手をしてください」

言われた通り、俺は霞と握手した。

「やっと、契約を結びましたか」

「うおっ!？」

「っ!？」

俺の後ろから、聞き覚えのある声が聞こえた。

まさか！？と思って振り返る。
蓮華が居た。

「下がって！ 愛美華です！」

ああ、そういえば、蓮華も愛美華だったな。と思い出した。
というか、仲間で敵対するつもりか！？

いや……俺が、蓮華が仲間ということ話を話せばいいだけだ。
霞を止めようとする。

しかし

「大丈夫ですよ、証さん。霞さんは、動きたくても動けない状態ですから」

……確かに。

力を入れている用だが、動けていない。

「何者だ！？」

「霞さんと同じで、証さんと契約した者です」

それを聞いた霞は『本当なの？』と視線で聞いてくる。
俺は頷いた。

「分かった。信じるわ」

「ありがとうございます」

自然と霞は構えを解いた。

「動けるな」

「あ、本当ですね」

蓮華は楽しそうに笑っていた。

「如月蓮華です。以後、よろしくお願いします」

「暁美霞です。よろしくお願いします」

互いの自己紹介が終った。

「先ほど、私を動けなくしたのは能力ですよね？」

「はい、その通りです」

「どんな能力なんですか？」

「秘密です。証さんにも言っていないませんから」

霞がこちらを向く。

俺は黙って頷いた。

「では、No. は？」

「No. は66です」

「No. 66!？」

霞が驚いた。

うん。俺だって驚いたから、仕方ない。

「下1桁が6の能力の本質は『幻想まぼろしを見せつける』。簡単にいえば、幻術系の能力のはず」

「ええ。他にも欺き、騙すという意味があります」

俺が聞いた感じでは、どちらも幻術系の能力に直結する。

「No. 6の能力は、情報やおおよそで検討はついているのですが、No. 66は分かりません」

何となくだが、俺も予想がついた。

「完全催眠、か」

おそらく、これ以上に『幻想を見せつける』という本質に近いものはないだろう。

自分で言っていてなんだが、凄くチートです。

「ええ。私もそう思います」

蓮華も同意した。

そして『ですが』と続ける。

「間違いなく、私の能力の方が応用が利きますし、凶悪でしょうね」
「いったい、蓮華の能力は何なんだ？」と聞きたくなった。

話し合い（後書き）

完全催眠は凶悪ですが、催眠をかける必要があるのが面倒なんですよね。

かかれば、凄くチートですが……。

蓮華の能力は、幻術にかけるということをしなくてよい。
その上、凶悪なチート。

始まり（前書き）

電気回路のテスト終わったよ！

やったね！

でも、再来週に電磁気学のテストが増えたよ。

テンション急降下？

来週には、電気数学のテストがあるんだよ！

泣けてくる。

始まり

7月15日金曜日

何事もなく、1週間ほど時間が過ぎた。

霞や蓮華曰く『今週中に戦いが始まる』との事だ。

ならば、気を引き締めなければ。

そう思って過ごしているものの、なかなか結界らしきものが張られない。

だからこそ、油断してしまう。

「証君、こんなところで何をしているんですか？」

「柳扇か。見ての通り、何もしてない」

「相変わらず、素っ気ないですね」

ふんっ、と俺は鼻を鳴らした。

「まあ、いつものことですからね」

それよりも

「決着をつけるのは、もっと先の事になるでしょうね」

最後に『では』とだけ言って、どこかに行ってしまった。

「食堂で言ってたことは、本気だったんだな」

意外と、執着するタイプなのかもしれない。

学校が終わり、いつもの帰り道を1人で歩いていた。

敦と義には『今日、俺用事あるから』と言って、先に帰っている。

それが1週間ほど続いている。

だから、2人は怪しく感じているだろう。

しかし、不快な表情は出さずに『おう、またな!』と言ってくれる。

俺には出来すぎた親友兼幼なじみだ。

「いや、前から分かったことか」

フツと、苦笑を浮かべる。

その時、大気が震えた。

色豊かな世界が

地震と思ったが、地面は震えていない。

だんだんと

ならば何だ？

モノクロの世界へと

答えは分かっている。

変わっていく

戦いの合図である、結界が張られた。

「……1人はまずいな」

「心配には及びません」

「うおっ!？」

いつの間にか、俺の隣には蓮華が居た。

「どうやって？」

「能力です」

愚問だったな。

しかし、蓮華は幻術系の能力はず。

ならば此処に居るのは

「幻術？」

「残念ながら、幻術ではありません」

ではどうやって、俺の隣に来たのだろうか？

「先行します。ついて来て下さい」

「おう」

考えてる暇は無さそうだ。

歩くこと15分。

俺たちは、商店街へと来ていた。

「人がいないな」

「それは、関係ある者しか、この結界は取り込みませんから」
しかし、ここはいつも賑わっている。

だから、いつもと違う雰囲気戸惑ってしまう。

「止まってください」

「どうした？」

ここから200メートル程離れた先に、何かが倒れていた。

「あれは……」

よく目を凝らす。

人だ。人が倒れている。

慌てて飛び出す。

しかし、蓮華に肩を捕まれ、止められていた。

「罨かもしれません」

確かに蓮華の言う通り、罨かもしれない。

ここは、慎重に行くべきだろう。

蓮華の後ろについて歩く。

だんだんと形がハッキリとしてくる。

20前半の男性だろうか？

黒のスーツを着て、近くには鞆が落ちていた。

蓮華が男の首元に手をあてる。

脈の確認だろうか？

「死んでますね」

「え？」

俺は、その言葉が理解出来なかった。

死んでる？

誰が？

目の前の男が。

急に怖くなり、体が震えだす。

分かっていた事だ。

覚悟の上だった。

死人はいつか出てしまう。

しかし、こんなにも早いとは思わなかった。

「……暖かい。殺されて間もない感じですね」

いや、それは言い訳にすぎない。

死人を見るのが早まっただけ。

そう考えるようにする。

しかし、体の震えが止まらない。

「恐怖は、悪い事ではありません」

蓮華が俺の体を優しく包み込む。

「私の体でよければ使ってください。少しでも、恐怖が取り除けるのなら」

「ああ」

声を絞り出す。

恐怖が頭を支配していたが、暖かな包容で落ち着いてきた。

「証さんは私が護ります」

敵からも、恐怖からも、何もかもから。

「絶対に？」

「絶対とは言いきれません。私も神ではありませんから」
ですが

「証さんが望むのなら、絶対を約束します」
「そうか」

俺は蓮華の胸の中で、恐怖から癒されていた。

5分後

「ありがとな。おかげで楽になった」

「あ、いえ、そんな、ええと……うう」

蓮華は顔を真っ赤にして俯いていた。

可愛い！ 可愛すぎる！

お持ち帰りの注文はできるのか？

いや、俺が主^{オーナー}だし、確認はいらないな。
なら、お持ち帰り決定！

「ヤッフォー！」

俺は蓮華に抱きついた。

「あ、あ、あ、あか、証さん！？」

「ん？ どうした？ 酷く狼狽して」

「な、な、何故、だだだ抱きついて」

「可愛かったから！あと、お持ち帰りする」

「え？ あうえ？ あばうらくしら！？」

最早、日本とは呼べないほど、酷く動転している。

「本当に可愛いな」

顔を近づける。

「あっ」

蓮華も目をトロンとさせ、顔を近づける。

そして、唇が

「何を戦場でいちちゃつしてるの？」

繋がらなかった。

俺は霞に頭を捕まれ、引っ張られていた。

「しかも、死人が目の前にいるんですよ？」

自重してください」

「空気読めよ」

「読んでます！　これが小説やマンガなら、読者は『ですよー』
と思ってるわ！」

うん。俺もそう思う。

「コホンッ。では、状況を整理しましょう」

蓮華は、ほんのり頬を赤くしながら話を進めた。

「結界が張られ、ここまで来た時間は15分程度」

「その間に殺されたってことですか？」

「はい。しかも、外傷が全く見あたりません」

確かに。

俺も確認したが、外傷が全くなかった。

「こんな事が出来そうなのは、下1桁が4の数字の愛美華でしょう
ね」

霞が呟くように言った。

「はい。おそらくN.O. 4の愛美華の仕業だと思います」

蓮華が霞の言葉に同意した。

でも、

「下1桁が4の能力の特徴って、何？」

俺の質問に霞が口を開く

「4（よん）は、4（し）とも読めるでしょ？」

「まさか……」

「そのまさかです。下1桁が4の能力の特徴は『死』。または『殺
す』こと」

殺しに特化した能力。

抵抗を許さず、無慈悲に殺す能力。

N.O. 4の愛美華の能力は恐らく

「『死を操る』か」

これ以上に、『死』や『殺す』事に本質が近い能力はないだろう。

「見回るか」

「はい、証さん」

「はい、証君」

蓮華と霞を連れて歩くが、今日は敵と出会わなかった。

始まり（後書き）

宇宙破壊攻撃よりも、死を操る能力の方が恐ろしいです。
宇宙破壊（笑）です。

だって、宇宙破壊は蓮華の能力でも（笑）になる能力だしね。
蓮華の能力がチートなだけです……。

死を操る能力と蓮華の能力は、同じぐらい凶悪。
細かい設定を除けば、蓮華の能力の方が強いかな？
いろいろ出来るからね。

では次回！

呼び出し（前書き）

勉強は……しない（キリッ

呼び出し

7月16日土曜日

俺は朝7時に起床した。

いつものようにダイニングへと向かう。

そこで見た光景は

「朝食がない、だと？」

机の上には、1枚の紙がおかれている。

何々？

証へ

母さんは友達に誘われ、少し出掛ける事にします。

夜には帰るから安心してね。

ああ、そうそう。

朝食の事だけど、証は簡単なモノなら作れるから、作っていません。

いざと言うときは、インスタント食品を食べて下さい。

母より

「いろいろとつつこみたいことや、言いたいことはある」

しかし！

「先ずは、飯が先だな」

俺は携帯を取り出し、あるところへ電話をかけた。

「急に呼び出してすまないな」

「いえ。証さんに呼び出されては、来ないわけにはいきません」

俺が電話をかけたのは、如月道場だった。

蓮華本人の携帯番号を知らないのしょうがない。

そして、蓮華に『家に来てほしい。事情は後で説明する』とだけ言い、電話をきった。

次の瞬間には、蓮華は家の前に居た。

そして、今に至るわけだ。

「緊急事態が発生した」

蓮華が『ゴクッ』と息をのむ。

「朝食が作られていない」

・・・

「へ？」

「だから、朝食が作られてないんだよ。母さんが朝から出掛けてるから」

「私に朝食を作らせる為に、私を呼んだ。と言うわけですか」

「おう」

蓮華は、黙って後ろに振り返り歩き出す。

「まあ、待て」

それを俺は、手を掴んで止めた。

「何でしょうか？」

ほんのり頬が赤い。

手を掴まれているので、恥ずかしいのだろうか？

うむ、可愛い！

いや、そうではなく

「正直に言おう。俺は蓮華を食べたい」

「どどど、どういうい、意味ですか？」

「性的な意味に決まってるだろ」

それを聞いた蓮華は、顔だけではなく、全身が赤くなる。

「しかし、学生がこんな朝からするのはどうかと思う」

だが

「俺はなんとしても、蓮華との愛を確かめたい」
だから

「蓮華、朝食を作ってくれ。朝食を食べれば、蓮華との愛を確かめられる」

暫しの沈黙。

「台所と材料を借りてもいいですか？」

「いくらでも！」

30分後

俺の目の前には料理が並べられていた。

うなぎの蒲焼き。

トマトサラダ。

ご飯。

吸い物。

「いただきます」

先ずは、蒲焼きから。

小さく箸で切り、食べやすい大きさにする。

そして、口に含む。

「う、うまい」

独自のタレで焼いているのか、今まで食べた事のない味に仕上がっている。

次に、ご飯を食べる。

ふっくらと仕上がり、甘味が増しているような気がする。

次に、吸い物。

香りが食欲をそそる。

汁を飲むと、心まで暖まる。

最後にサラダ。

こちらも独自のドレッシングなのか、味わいが違う。

皿から食べ物が消えるのに、時間はそれほど掛からなかった。

「ごちそうさま」

「お粗末さま」

食器を下げ、洗い物までしてくれる。

「こういうのを夫婦って言うんだろうな」

その時、横から食器の割れる音がした。

「すすす、すみません」

「ケガはないか？」

「はい」

「ならいい」

俺は、食器が割れたことを気にしないタイプの人間だ。

しかし、人がケガをしていないかを心配する人間ではある。

蓮華が素手で割れた食器に手を伸ばす。

「危ないぞ」

「大丈夫です。ほら」

そう言って割れていない食器を見せた。

俺は台所に回り込み、床を確認する。

そこに破片は残っていない。

つまり、先ほど割れたハズの食器を蓮華が持っている。

「これも能力なのか？」

「はい。私の能力は、種々と応用できるんです」

蓮華の能力が、さらに謎に包まれた。

「実は、もう1つ頼みたい事がある」

「はい。何でしょうか？」

「俺を鍛えてくれないか？」

蓮華の目が細くなる。

「理由を聞いてもいいですか？」

「いざという時のためさ」

少しでも抵抗出来る力があつた方が便利だ。

「わかりました。では、動きやすい服装に着替えてください」
俺は2階に上がり、ジャージに着替えた。

「お待たせ」

「いえ。待つてはいません」

そういう蓮華もジャージ姿になっていた。

「どうかしましたか？」

「いや、そういう服装も似合ってるなあ、と思っただけ」
蓮華の顔が赤くなる。

「先ずは体力作り。町を1周します」

それだけ言うと、風のように走り去った。

「おい！待ってくれ」

俺も後に続いた。

この町を1周というと、20～30キロメートル。

しかも、上り下りが激しい道もある。

特に、学校の前を過ぎた1キロメートル先からは地獄だ。

10分ほど走れば息が上がっていた。

蓮華は俺のペースに合わせてくれていた。

2時間ほど走り続け、ようやく家に戻ってこれた。

既に体力は限界だった。

蓮華を見ると、少しも汗をかいていない。

別に新陳代謝が悪いわけではなく、単に俺が遅かったただけだ。
主に最後の方が。

「体力作りをしないと、話になりません」

ごめん、と心の中で謝った。

走るのは足腰を鍛えられるから、一石二鳥なのかもしれない。
今日は蓮華に走らされ続けた。

呼び出し（後書き）

眠い

ただそれだけ

生まれつき(前書き)

戦闘前まで行きます。

生まれつき

7月17日 日曜日

今日も蓮華を呼び出した。

「蓮華、来てくれてありがとな」

「いえ」

「蓮華ちゃん、いらっしやい」

「はい。お邪魔します」

既に蓮華はジャージ姿だった。
やる気満々だな。

俺は、まだ着替えていないのに。

「証は、運動するつもりなの？」

「ああ。体力作りだけだな」

「その体じゃ、難しいわよ？」

「難しいだけだろ。俺はやる」

それだけ言くと、俺は2階に上がっていった。

「証さん、聞きたい事があるのですが」

「何？ あと、呼び方は義母さんでも良いわよ」

「いえ。まだ早いと思います」

自分で言った後に『しまった!？』と思っても、もう遅い。

「『まだ』と言う事は、いずれ、そう呼んでくれるのね？」

苦笑で誤魔化す事しか出来なかった。

「それで、証さんの体について言っていた様ですが、何か病気を持たれているのですか？」

「いえ、全然。証は健康体よ。今まで、風邪を引いたことがないしね」

「では、何を？」

証は、わずかに顔を伏せる。

「証は生まれつきで、胸の真ん中あたりがへこんでいるの。丁度、気管支があるあたりね」

気管支がある辺りがへこんでいればどうなるか？

そんなものは決まっている。

「証は普通の人よりも、気管や気管支が細くなっているの」
気管が細くなるという事は

「そのせいか、肺活量が少ないの」

肺活量が少なければどうなる？

「だから、息切れが早いし、体力の回復速度が遅い」

つまり、証は

「激しい運動には向かない体なのよ」

蓮華は何も言えなかった。

「お待ちせ」

俺が1階に降りていくと、しんみりとした雰囲気漂っていた。

「どうした？」

「何でもありません。さあ、行きましょう」

俺は、走りに出掛けた。

「そういや、昨日は結界が張られなかったな」

「不定期ですから、結界が1日ぐらい張られなくても不思議ではありません」

それもそうだと納得する。

全体の半分程度の距離を走り、駅に到着した。

「ここで5分休憩しましょう」

「おう」

「どうぞ」

お茶を渡される。
準備がいいな。

「あと、これも」

タッパーを2つ渡された。

片方を開けてみる。

白くて粒状のモノが入っていた。

というか、これは

「食塩か」

「塩分を摂取するのも大切です」

確かに。

渋々、食塩を1摘みして、口に入れる。

流石に塩辛い。

もう1つのタッパーを開ける。

「氷砂糖？」

「糖分もちゃんと摂取してくださいね」

俺は氷砂糖が好きだ。

抵抗なく口に入れる。

甘い。

「後、3分ほど休憩すれば、また走ります」

「おう」

氷砂糖の甘味を堪能する。

その時、世界がモノクロに変わった。

「今かよ!」

「回りに気配はありません。敵は近くには居ないようです」

その言葉を聞いて、少し安心する。

「移動します」

次の瞬間、見覚えのある公園の入り口にいた。

蓮華が能力を使ったようだ。

「何なのよ!？」

俺の後ろから、聞いたことのある声がした。

霞だ。

「私の能力で、霞さんを移動させただけですよ。あと、気づいてますか？」

「敵さんの登場ね」

公園の奥に人影が見える。

あれが、そうなのだろうか？

「来る！」

「ちっ！」

蓮華が俺の体を抱え、飛び上がる。

すると突然、地面から土の槍が出てきた。

「あぶねえ」

「次が来ます！」

公園の中から、土の塊がマシンガンのように飛んできた。

しかし、それが届くことはない。

何故か、土の塊は向かってくる途中で、粉々に砕け散ったからだ。

「行きます」

公園の中に向かって急降下する。

死ぬ、死ぬ、死ぬー！

心の中で絶叫した。

急降下途中、土の塊がマシンガンのように撃ち出される。

しかし、俺たちに当たる前に砕け散っていく。

砕け散ると分かっていても怖い。

そして、蓮華は地面に降り立った。

敵を見据える。

茶髪の女の子。

「証さん、どうしますか？」

「そうだな」

「待って下さい」

横に來た霞が言った。

「私にやらせて下さい」

「……わかった。けど、出来るだけ傷つけるな」

「……頑張ります」

霞が1歩前に出る。

「行きます！」

初戦闘が始まった。

生まれつき（後書き）

次回は、いよいよ初戦闘です。
ついでに、証の生まれつきは、作者がモチーフ。
たまに、いるらしいですよ？

俺は、シャトルラン100はいます。

虚数（前書き）

グロテスクな描写があります。
苦手な人は注意。

虚数

「行きます！」

その声と共に、纏う雰囲気が変わった。

「ほんとさー、証君に手を出そうなんて何様よ、あんたは？ 証君に触れていいのは私だけ。それが分かんないの？ 分からないなら死になさい。分かってても死になさい。私の前に、証君の前に立ちただかるなら、殺すわよ？」

早口で喋ったが、はっきりと聞こえた。

俺は一瞬、放心してしまった。

「いや、霞はどうしたんだよ？」

「性格が能力に引っ張られています」

そう言えば、霞の能力は『虚数を操る』だったか？

虚数。

人間の頭の中だけに存在し、実際には存在しない数。

人間が作り出した、計算が楽になる道具。

そして、この世の物は、全て実数で表す事が出来る。

しかし、だ。

それは現実での話。

現実を正の世界とするなら、負の世界があるはずだ。という考え方がされる場合がある。

つまり、正の世界は実数で表せる世界ならば、負の世界は虚数で表す事が出来る。

それはつまり『虚数を操る』というのは『負の感情を操る』ということ。

正確には『負の感情が具現化したものを操る』能力。

「だから霞は今、ヤンデレモードです」

「ヤンデレなんて、俺の守備範囲内だよ」

「でしょうね」

霞に目線を向ける。

霞の回りから、黒い塊が湧いて出てくる。

人形だったり、犬形だったり、形も大きさも不規則。

「私と証君の道を塞ぐな！」

それらが、一斉に動き出した。

速さも様々。

速いものから、遅いものまで。

不規則に敵の愛美華を襲う。

まずは、右側から人形の黒い塊が腕を振るう。

しかし、地面から土の槍が出てきて、腕を串刺しにする。

「あまい！」

土が腐っていく。

負の感情の塊は、土を腐らしてしまう。

その腐らした土の影から、犬形の黒い塊が飛びかかる。

敵は横っ飛びで攻撃をかわした。

そこに、ネズミ形の黒い塊が襲う。

間一髪で跳び上がり、攻撃を避けた。

さらに、霞は追い討ちをかける。

鳥形の黒い塊が飛来する。

「はあっ！」

土の壁を作り出し、なんとか防ぐ。

「それ、私も使わせてもらおうわ」

土が一瞬で黒色に変色する。

黒い津波の様になり、敵の体の中に入り込んだ。

「外傷は与えないのか？」

「そのようです。しかし、ああいうタイプは、心に傷をつける。それ、死に至るほどの」

その時、敵が口から血を吐き出した。

尋常な量ではない。

治まったと思えば、また血を吐き出す。
その繰り返し。

そしていつしか血を吐き出さなくなる。
出血死。

敵は血の海に倒れていた。

「おい！ かすm」

「待ってください、証さん」

「なんだよ？」

「怒らないで下さい。霞は証さんの頼み事は聞いています」
敵を傷つけるな！というヤツだろう。

確かに、敵に外傷はつけてはいない。

だけど、霞は心を殺し、敵を殺した。

俺の言い方が悪かったのかもしれない。

戦闘を見ていただけの俺が、言うべきではないのかもしれない。
それでも、女性の血を見るのは嫌だった。

「終わったよ、証君」

霞が、嬉しそうに笑いながらやって来る。

「撫でて欲しいな」

俺は無言で手を伸ばし、霞の頭を撫でてやった。

その時、パーンツと銃声音が鳴り響いた。

俺の頭から血が吹き出る。

「え？」

俺も何が起こったのか分からなかった。

しかし、直ぐに目の前が暗くなった。

奥の方に人影が見える。

霞もそれが見えたのか

「待て、この糞虫ヤロウ！」

飛び出しそうになる。

しかし、私はそれを止めた。

「待ちなさい」

「何？ 見逃せっていうの？」

「いえ。私に殺らせなさい」

「誰が」

「殺らせなさい」

ヒッ！？と小さな悲鳴を上げ、尻餅をついた。

さて、譲ってもらったと考えてもいいのか？

いいのだろう。

ろくな死に方はさせない！

男は銃ホルダーにしまい走っていた。

国から許可をもらい、家に飾っていた銃が役にたつとは思ってもよらなかった。

自分の手駒を失ったのは手痛い、契約破棄された愛美華を見つけ、また契約すればいい。

公園の茂みから道路に出る。

ドンツと、誰かとぶつかってしまった。

「すまん」

素直に謝る。

さっさと、ここを立ち去るためだ。

相手を見る。

美しい女性だ。

全てを魅了するような美しさを持っている。

「いえ、こちらこそ」

声も美しい。

何かを命じられれば、命じるままに動くだろう。

「それよりもどうしたんですか？ そんなに急いで」

「先ほど公園で人が血を流して倒れているのを見たんだ。それで、携帯を持っていなかったから、走って交番に行くとこだったんです」

後からいろいろと言われるとまずい。

そう思い、真実と嘘を交えて言う。

「正直に言いなさい」

「え？」

「私、正直に話す男性は嫌いじゃなくてよ」

「俺が銃で人を撃ち殺したんだ。それで、そいつの愛美華に見つかったから逃げているんだ」

自分でも驚くほど、口が早く開いた。

「本当の事を話してくれたから、ご褒美を上げる」ご褒美という言葉に、体が反応してしまう。

「ふふっ。体は正直ね」

女性は手を伸ばし、男の頭を掴んだ。

「グアッ!？」

「私、あの子がお気に入りなのよ。それを殺されたとなれば、アナタを殺すしかないわ」

怪しく笑う。

そこに

「待ちなさい。そいつを殺すのは私です」

蓮華が現れた。

「なら、こうしましょう。先に私がこの男を殺す。その後、私が蘇生させるから、アナタが殺せばいい」

「……わかりました」

女性は満足そうに頷く。

そして

「弾けろ」

ささやいた。

その瞬間、男の体は弾けた。

血が回りに飛び散り、中の臓器も地面のあちこちに飛び散った。肉片や骨も、そこら辺に飛び散っている。

見るのも無惨な、グロテスクな状況が、そこにはあった。

「もっと綺麗に弾けなさいよ」

女性は、男をこんな風にしておいて文句を言う。

「まあ、いいわ。戻りなさい」

その言葉で、飛び散った血、肉、骨などが固まり、男を作り上げた。

「おい。今、俺」

「黙りなさい」

それだけで男は黙ってしまう。

「アナタの番よ」

「分かってます」

男はもう1度、肉体が弾けとんだ。

「アナタもえげつないわね」

「これぐらいが妥当です。次に会った時は、容赦しません」
それだけ言うと蓮華は立ち去った。

「あ、どうしたの？」

「殺してきました」

見るのも無惨な姿になってはいるが。

「こういう風に使いたくはなかったのですが」

蓮華が能力を使う。

証の指がピクリと動いた。

「1度は死んでますから、契約が切れています。結び直さなくては
いけませんね」

「そうね」

目を開ける。

「あれ？　ここは？」

確か、俺は頭を撃たれて死んだはず。
何故？

「私の部屋です」

横から聞いた事のある声がした。

「蓮華の部屋だったのか。初めてだな」

「そうですね」

「俺は死んだよな？」

「はい。ですが、私の能力で生き返らせました」

「何？」

蓮華の能力は幻術系のはず。

それが、蘇生に繋がるとは思えない。

「私は、都合が悪いことは否定するんです。こうではない。こうであって欲しいと」

「うん」

「それはただの理想だし、妄想に過ぎない。全て、私のいいようにしてるだけ」

「うん」

「私は、嫌な女ですよ」

「そんな事はない」

「ありがとうございます」

しかし、成る程な。

「なあ、もしかして蓮華の能力って」

「はい、証さんの想像通りかと」

言う前に肯定された。
なるほど。

No. 66と言うだけあって、チートな能力だ。

正直、完全催眠よりも質が悪いかもしれない。

応用数は、蓮華の能力が確実に上だな。

こうして1日が終わった。

虚数（後書き）

証が、まさかの死。

しかし、能力でどうにかなるのがこの物語。

もうやだ、この世界。

蓮華の能力に予想がついたのではないのでしょうか？

証は分かったようですが、皆さんはどうでしょう？

ちゃんと読めば、予想は出来るように書いています。

分からない人は、ちゃんと読んでね。

ついでに、美しい女性の方も、能力に予想がつくのでは？と思って
います。

今まで、何度も書いているから。

では次回！

水（前書き）

仲間が増えます

水

7月18日 月曜日

「なあ？ 証」

「ん？ 敦か。なんだ？」

「いや、蓮華が最近綺麗になったような気がするんだ」

「あ、それは俺も思ったあ」

蓮華が？

ばかな。

人間が急に綺麗になるわけがない。

いや、蓮華は愛美華だったな。

だとすると、あり得なくもないのか？

人間と交わる度に、人間と愛美華との愛が強いほど、美しく華やかになると言ってたしな。

しかし、交わった記憶なんてどこにもない。

うーん、と悩む。

「証には分からないのか？」

「ほら、もともと美化されているんじゃないかなあ？」

「ああ、なるほど」

敦と義は、勝手に勘違いをしていた。

まあ、あながち間違いでもないだろう。

「次は数学か」

数学は、不定積分を習っているところだ。

俺は教科書を暗記しているが、ちゃんと授業は先生の話に傾けている。

「この問題を……証。やってみろ」
当てられてしまった。

問題に目を向ける。

$$\int (\cos x)^2 dx$$

簡単な問題だな。

$(\cos x)^2$ を加法定理を使い変形する。

すると $1/2 + (\cos 2x)/2$ になる。

つまり

$$\int 1/2 + (\cos 2x)/2 dx$$

$$= x/2 + (\sin 2x)/4 + C \quad (C \text{ は積分定数})$$

が答えだ。

「簡単すぎたか？」

「そんな事はないです」

そう言って席に戻ると

「流石だな」

「それほどでも」

こんなモノはたしなみだ。

数学はもっと奥の深い学問である。

そう思った時、世界がモノクロに変わった。

「授業中に変わってほしくはなかったな」

愚痴をこぼしてもしょうがない。

蓮華と霞に合流しよう。

走って3年2組の教室に向かう。

「証さん！」

蓮華も同じ事を考えていたようで、4組と3組の間で鉢合わせした。

「どうしますか？」

「今日は川の方に行こう」

「はい」

景色が一瞬で変わる。

「これは慣れが必要ですね」

後ろから霞の声が聞こえた。

霞も川の近くに移動してくれたのか。

正直、助かる。

「まあ、慣れるまで頑張ってくれ」

「分かってます。で、どうしますか？」

俺が考え出すよりも早く、遠くの方で何かが光った。考えるよりも先に、足が動いた。

「行くぞ！」

何かが光った方向に走った。

何かがある、と直感したからだ。

お姉さんは川辺を歩いていた。

契約者を見つける為だ。

お姉さんの契約者は、3日前の金曜日に死んでしまった。

原因はお姉さんにある。

その日は、初めて結界が張られた日。

お姉さんの契約者は、結界が張られると同時に駆け出してしまった。

お姉さんは『危ないから離れないで』とは言ったものの、走って追

いかける気分ではなかった。

小走りで、視界から外れない程度で追いかけていた。

そして、契約者が商店街の小道に入って行くのを目撃した。

『まったく』とあきれながら、契約者の後を追った。

そして、商店街の小道から抜け出した時に見たものは、契約者の転がっている姿。

既に契約者は死んでいた。

私の視界から外れ、1分にも満たない時間の間で、だ。

そして契約者を探し、今に至る。

なかなか見つけられない。

そして、歩いている最中に世界がモノクロに変わった。

幸い、近くには水が大量にあるので、地形では有利だ。

しかし、能力の質が落ちてきているのは事実。
早く契約者を探さないと。

そう思い、先を急ぐために駆け出そうとした。
しかしその時、身体中に電流が走った。

「ガッ!？」

目眩がする。

しかし、ここで倒れてはならない。

しっかりと踏みとどまる。

電気の弾けるような音がした。

来る!

横っ飛びで攻撃を避けることに成功した。

「お姉さんには、もっと優しくしなきゃダメだぞ」

いつものように、落ち着いた表情で言った。

「アンタ愛美華でしょうが!手加減なんてするわけないでしょ!」

手から、雷のようなモノを出してきた。

避けられない!

世界が白色に染まった。

「アレだ!」

金髪で短髪の女性のからは、電気のようなものが出ていた。

見た目は中学生ぐらいか?

「!?!」

その中学生ぐらいの女性に隠れ、分からなかったが、水色髪の女性が倒れ伏していた。

「愛美華が2人も釣れるなんてラッキーね」

「蓮華は相手をしてくれ。霞は俺の護衛だ」

「「はい!」」

俺は走り出す。

それと同時に霞が横に、蓮華が前に出た。

「死になさい!」

雷がマシンガンの様に放たれる。

「ムダです」

いつの間にか刀を出し、雷を斬っていた。
雷を斬るってスゴいな。

「雷切り。雷を切ったとされる日本刀です」
なるほど。

だから、雷が斬れたのか。

「ついでに言うと、雷切りではなく手刀でも斬れますが」
うん。

もう何もいうまい。

俺は敵の横を走り抜けた。

そのまま倒れている女性を抱き上げ、離れた場所に運ぶ。

「やっぱり虚だったか」

「ふふっ、久しぶりね。元気にしてた？」

「元気だよ」

「ねえ、知り合い？」

「まあな」

名前は知っているし、知り合いと呼べるだろう。

「衰弱してる。……契約者をなくしたのね？」

「ええ。流星のお姉さんも困ってるわ」

「なら、俺が契約者になる！」

「え？」

「ダメか？」

「無理よ。証君は、既に契約してるでしょ？」

確かに俺は契約している。

しかしだ。

「問題ない。後7人くらいはな」

虚の顔が驚きに染まる。

しかし、それも一瞬のこと。

「お姉さんも証君のハーレムの一員かな？」

「虚が良ければ」

「ふふっ、お姉さんは手強いわよ？」

「望むところだ！」

虚は満足そうに頷く。

そして

「んっ」

「っ!？」

キスをされてしまった。

「契約完了ね。派手に暴れてやるわ」

俺と霞は、その場で放心していた。

「さっさと当たりなさい！」

雷を撃って撃って撃ちまくっていた。

しかし、蓮華には掠りもしない。

するとそこに

「その愛美華は、お姉さんにやらせてくれないかしら？」

「わかりました」

蓮華は手に持っていた雷切りを消す。

「ありがとね」

「いえいえ」

蓮華は少しだけ下がり、戦いを見据えることにした。

「No. 18 水嶋虚。行きます！」

虚の回りに水が渦巻き

「はっ！」

津波となって襲いかかった。

蓮華はその津波を見ると、証と霞のところまで移動する。

そして2人を抱え、もう少し離れた位置に移動した。

「私の電撃で」

雷が撃ち出される。

しかし、弾かれてしまった。

「アナタの電撃は威力は申し分ないけど、お姉さんの津波を破るほどじゃないわ」

「くそっ！」

飛び上がって避け、上空から雷を乱発した。

「あまいわ！」

対する虚はもう1度津波をおこし、雷を防いだ。

雷と水の撃ち合いが始まる。

次第に地面が水で溢れていく。

「さっさと倒れなさいよ！」

「お姉さんは敬いなさい！」

水と雷が激突する事、約5分。

「何……これ？」

雷を撃ち出していた女性が膝をついた。

「硝酸イオンを摂取し過ぎたわね。硝酸イオンだって大量に吸い込めば有害。常識でしょう？」

硝酸イオンは無害と主張される事がる。

しかし、硝酸イオン自身が人体に害を与える事はなくとも、吸収された硝酸イオンが体内バクテリアで有害な亜硝酸イオンに変化する可能性がある。

実際、EUでは、野菜の残留硝酸の規制値が設けられている。

「私が出してたのはただの水じゃない。それに気づけなかったアナタの負けよ」

だからこそ、硝酸イオンに気づいた蓮華は、素早くその場から離れたのだ。

ついでに、硝酸イオンは自分の能力の一部なので、虚自身に害はない。

証に近づき

「No. 18 水嶋虚。能力は『液体を操る』こと。液体であるなら、

成分が何であれ操れるわ」
また1人、頼もしい仲間が増えた。

水（後書き）

敵が出していた雷は威力は高いが、電流値は低い。

人間が感電死しないほど。

ついでに、人間は50ミリアンペア以上の電流が心臓や脳に流れると死んでしまいます。

1アンペアの電流でも、心臓や脳に流れなければ死にません。

水自体は絶縁体なので、相性は良い。

欲求不満（前書き）

日常回

欲求不満

7月19日 火曜日

「今朝から欲求不満が溜まってるんだが、どうしたらいい？」

「自慰するといいよお」

義は躊躇する事なく、そんな事を言ってきた。

それも1つの方法だが、正直言う自慰はしたくない。

いつでも出来るように、今は溜めておきたい。というのが本音だ。

「んー、自慰は無しで」

「そっかあ」

「なら、体を動かして発散するしかねえだろ。今日は体育もあるし欲求不満は運動で発散出来るものなのか？」

しかし、一時的には忘れることが出来そうだな。なら決まりだ。

「今日の体育は何するか知ってるか？」

「バスケって言ってたような気がする」

バスケか。

運動量の多いスポーツだ。

正直、この体でどこまで出来るか分からないが、やれるだけやってみよう。

しかし、体育まで時間がある。

だから、何故欲求不満が溜まってるのかを話そう。

今朝の出来事だ。

何時ものように、携帯のアラーム音で目を覚ました。

その時、ムニユツという柔らかい感触が右腕に伝わった。

何だ？

この柔らかい感触は？

右を見ると、Yシャツを着た虚が寝ていた。

どうやって入ってきた？とか、何故ここにいる？という疑問はある。あるのだが、そう言う問題ではない。

Yシャツという服きから、豊満な胸の谷間が見える。

エ、エロい！

興奮してもしょうがない。

つうか、これはヤツてもいいのか？

ヤツてもいいよな？

というよりやる！

いや、やらせて。

よし、やろう！

今朝の俺は、普段以上の思考速度だった。

ごめん、虚。と心の中で謝り

「ヒッホー！」

俺は上に大きく飛び上がった。

このまま行けば、虚にダイブ出来る。

「うるさいなあ」

起こしてしまっか！？

だが遅い！

既に俺は落ちてきている最中。

このタイミングは避けられない！

しかし、俺は間違いに気づく。

確かに、このタイミングは避けられない。

『普通』の人間なら。

つまり、俺が言いたいの

「まったく。しょうがないなあ」

一瞬で背後に回られる。

体をガッチリとホールドされる。

俺の背中に柔らかな感触が伝わる。

そして、柔らかな感触を堪能しながら、ベッドにうちつけられた。

返り討ちになる、という事だ。

「お姉さんに何をしようとしたのかしら？」

「襲おうとしました！」

「素直ねえ。お姉さんは、そう言う男性は好きよ」

「ありがとうございます」

相変わらず、ホールドされたまま答える。

痛み？

あるに決まってる。

しかし、背中に伝わる柔らかな感触のおかげで痛みを誤魔化せる。

それに、俺たちの業界ではご褒美なんだよ！

「お姉さんとしたかったの？」

「もちのろんです！」

「ふーん」

ホールドを解き、背中から退いてくれる。

ああ、折角の柔らかな感触が。

「この格好をどう思う？」

振り返って、改めて虚の姿を見る。

ブカブカのYシャツを着ているだけだった。

下はYシャツでギリギリ見えない。

「エロイです」

「性欲が湧く？」

「それはもうボコボコと音を発ってます」

「そうなんだ」

狂気の笑みを浮かべた。

虚はもしかしてDS？

そう思っても仕方ない。

「おねだり出来たら、してあげる」

上から目線。

女王様なのか？

しかも『してあげる』と言うことは、俺は受け確定か。

いや、出来るなら文句は言えないか。

それに、ドSだろうが、女王様だろうが、俺の守備範囲内だ。

「俺のチ○コに虚のマ○コを挿入して下さい。お願いします」

「うん。また今度ね」

え？

また今度？

はっ！？

『今』してあげるとは、一言も言っていないじゃないか！

いや、これは俺が攻める事が出来る。

そうと決まれば、即行動！

「じゃあね」

の前に、虚は水となり消えた。

「チクシヨオオオ！」

俺の叫びが家中に響いた。

そんなこんなで、今朝から欲求不満が溜まっていた。

体育は敦が言っていた通り、バスケットだった。

チーム分けをした結果、俺、敦、義のしししトリオが集まった。

そして、苗字しか知らないが、福島さんと渡辺さんの女子2人が一緒にチームだった。

女子も一緒なのは都合上だ。

「さて、ポジションはどうする？」

「PGは証でいいだろ」

ポイントガード

「確かにい」

「いや、待て」

確かに、俺もP Gが適しているとは思っている。
しかし、それでは女子に負担をかけるかも知れない。

「あの、P Gって何ですか？」

「バスケにおけるポジションの1つだよ」

P Gというのは、いわばチームの司令塔の事だ。

ドリブルでボールを運んだり、味方に指示を出しパスを出す。

回りを活かし、時には自分できり込んで点を取るポジションだ。

「初めて知りました」

シューティングガード・サオウネ・ポフオセシター

「他にはS G、P F、S F、Cがあるね」

それぞれ簡単に説明しよう。

S Gは、外からのシュートを決めるポジション。

P FとS Fの役割は同じで、ドリブルで中にきり込み、シュートを決めるポジション。

Cは、リバウンドを取ったり、守備が得意な人がつくポジション。
基本的にCの人は長身だ。

「説明はこれぐらいでいいかな？」

「うん」

「じゃあ、改めてポジションを決めよう」

そう言ってポジションを決めようとしたとき

「そろそろ試合を始めるぞ！」

間が悪いな。

「授業だし、ポジションは自由にする。でいいかな？」

「うん！」

「つうか、最初からそれでいいだろ」

耳が痛い。

ここからはバスケ用語がでてきます。

【】で説明するのでご安心下さい。

ジャンプボールは敦が飛ぶ事になった。

「ルールの再確認をする」

トラベリング、ダブルドリブルは反則。

あまりにも酷いファールも同様。

24秒、8秒、5秒、3秒ルールは無し。

バックパスはあり。

ジャンプボールはあり。

1試合は10分で流し。

「こんなところだな。楽しんでいけ」

そして、ボールが高く上げられた。

最高点に達したところで両者が跳ぶ。

弾いたのは敦。

そのボールを俺が拾い、ドリブルで敵のリングに目指す。

右側から右手でドリブルしていく。

すると、敵が1人俺の前に立ちふさがる。

右にフェイントをかけ、反対側にレッグスルー【股下でドリブルチェンジする技】。

あっさりと敵を抜き去る。

すると、また1人敵が立ちふさがる。

構わず俺は跳んだ。

敵もつられて跳ぶ。

あまいな。

「これ、チーム戦なんだけど」

ビハインド・ザ・バックパス【腕を背中後ろに回し、逆方向にパスを出す技】。

受け取ったのは

「ナイスパスウ」

義だった。

レイアップシュート【ドリブルシュート】を決める。

「証、やるな」

「まあな」

当然の様にいうが、レッグスルーもビハインドザバックパスもミスをするんじゃないかと不安だった。

さて、ディフェンスはゴール下に前3人、後ろ2人。3－2の形。

さらに、試合が始まる直前に、女子2人には、そこに来た敵だけをマークやディフェンスをしてくれと頼んでいる。

簡単版ゾーンディフェンスの出来上がりである。

ついでに、敦と義には『ディフェンスは2人がしっかりしてくれ』としか伝えていない。

だから、ゾーンが出来上がっているわけではない。

ディフェンスは前が左から福島さん、義、渡辺さん。

後ろが敦、俺の順。

義の後ろに空間が出来る。

敵がこれを見過ごすわけがない。

右側から敵が走り込んでくる。

渡辺さんがふりきられる。

予想通りかな？

敵が中に走り込んできた味方にパスを出す。

あまいな。

「ボールミート【ボールが来る方向に動きながら取ること】しないと取られるぜ？」

パスカットする。

そのままドリブルで左側から敵リングへと目指す。

しかし、敵に回り込まれた。

右を見る。

敦が走っているのが見えた。

俺はドリブルをしながら、敵の右腰辺りに腕を通しパスを出す。

「くそっ！」

敵は振り返るが、ボールが見当たらない。

それもそのはず。

ボールは証が持っていた。

パスを出した！と見せかけて、手首を使い、敵の左側にボールを通し、自分のボールとしたのだ。

俺はドリブルで敵を抜いた。

「おい、証！お前ばかり目立ってずるいぞ」

別に目立ちたくてやってるわけじゃない。

それに、俺だって失敗するかもしれないという恐怖がある。

俺の場合は、やってみたら偶然出来た。といった具合だ。

敦にパスを出さなければ何か言われそうだ。

パスを出す。

「よっしゃ、キターー！」

ボールを受けとると跳び上がりダンクを決めた。

「どうだ！」

「カッコいいよ」

「だろ？」

喜んでいたのでよしとする。

ボールを持った敵がやって来ると

「よっしゃ、来いや！」

テンションが高くなっていた。

抜かれたら、バックシュートに気をつけておこう。

チェンジオブペース【緩急をつけたドリブル】でタイミングを見計

らう。

そして動いた。

左に一步。

そこからバックロール【片足を軸足にして回り、敵を抜く技】。

右に抜いてきた。

しかし、バックロールは敵が一瞬見えなくなるのが欠点だ。

その一瞬で敦は回り込んでいた。

敵は驚いた表情を見せるが、バックチェンジ【腕を背中 of 後ろに回し、反対側にドリブルする技】で左に抜こうとする。

しかし、それも敦は阻んでみせる。

敵は止まり、後ろにジャンプする。

フェイダウェイ【後ろにジャンプしながらシュートを撃つ技】か！
いや、これは……。

敦もブロックするために跳んだ。

「あまいよ」

腕を背中に回し、股下からパスを出す。

そこに敵がきり込んできた。

やはりか！

俺は止めるために動き出していた。

敵の前に立ちはだかる。

「さっきのお返しだ」

敵は背中に腕を回し、そこから手首をうまく使って俺の頭上にボールを飛ばす。

俺は跳ぶがとどかない！

俺が居たところはがら空きになっている。

と言うことは

「ナイスパス」

敵が走り込み、パスを受け取ってシュートを決めた。

「やられたなあ」

「証。やり返してやろうぜ！」

「だな」

白熱した試合が続いたが、15対16で負けてしまった。

「惜しかったな」

「負けちゃったねえ」

「頑張ったからよしとしよう」

次は負けない！

欲求不満（後書き）

バスケの話になったなあ。

理論上は出来る動きも取り入れようかと思っただけど、体を壊す話になるので断念。

死と破壊（前書き）

敵が登場するが、戦わない。
何故なら日常だからだ。

死と破壊

7月20日 水曜日

学校が終わるとすぐに家へ帰った。

体力をつけなければならぬからだ。

そのためには、なるべく早く帰り、ランニングに出かける。

いつもは学校の方向に走るのだが、今日は川の方に走っていた。

何故？と聞かれても困る。

そういう気分だったからだ。

走る道を変えることで、違うものが見えたりするかもしれない。

走ること5分。

川が見えた。

そこには蝶が二匹、空中を舞っていた。

「青いな」

青い蝶はいるが、日本にもいるんだな。

これは運が良いのか？

それとも悪いのか？

もしかしたら、そのどちらかもしれない。

青い蝶につられて走る。

5分ほど走ると、橋の近くまで来ていた。

この橋はこちらと向こう側を繋ぐ、数少ない橋である。

その橋の下に女性が佇んでいた。

思わず足を止める。

青い蝶も女性の肩にとまった。

「あら？」

「どうも」

軽く会釈をする。

人は第一印象が大切だ。

「ふふっ。コレも運命かしらね？」

「はい？」

「いえ、こちらの話だから気にしないで」
楽しそうに笑っていた。

外見が美しいからだろうか？

笑っている顔がより美しく見える。

それにしても着物姿とは珍しい。

着物なんて滅多には見られないからな。

「どうしたの？」

「いや、別に」

「そう」

その時、目の前から腹の虫が聞こえた。

お腹が空いているのだろうか？

「何か食べに行きますか？ 奢りますから」

「いいの？」

「はい」

美人の女性のために金を使うのは、痛くも痒くもない。

「なら、ご馳走になるわ」

「分かりました。なら、移動しましょう」

俺は商店街に向かうことにした。

商店街には飲食店もあるから、大概の物は食べられるはずだ。

「何が食べたいですか？」

「お肉」

「というこは、焼肉屋か」

出費は高いが、目の前の女性が喜んでもらえるなら、安いもんだ。

「ここは何なの？」

「焼肉屋だよ。見えただろうけど」

俺たちの目の前には、古くさく小さな家。

一見、誰かが住んでいるとは思えない。

いや、仮に住んでいたとしても、焼肉屋には見えない。
所謂、知る人のみぞ知る店。

「ここが一番美味くて安いんだよ」

「見かけによらないのね」

「そうだな」

俺がここを見つけたのは、興味本意で扉を開けたのがきっかけだ。
まさか、人が住んでいて、焼肉屋だったとは思わなかった。

「こんにちは」

扉を開き、中に入った。

「証君か。元気にしてたか？」

「はい。石田さんもお元気なようで」

「隣の子は、彼女さんかい？」

「いえ。偶然出会い、お肉が食べたいと言っていたので、ここに連れてきました」

「そうかい。ゆっくりしていつてくれ」

俺たちを出迎えてくれたのは、石田哲さん。

この店の店主だ。

妻の智美さんと、この店を営んでいる。

ついでに、漢字を見たときは、智美と読んでしまった。

「はい。メニューだよ」

「ありがとうございます」

哲さんは、女性にメニューを渡して注文を待つ。

「オススメはありますか？」

「あるよ。ちょっと待っててね」

カウンターの奥へと消えていった。

商品を持つてくる気だな。

その間に自己紹介を済ませておこう。

「俺は竜田証。君は？」

「火鳥朱雀よ。よろしくね、竜田君」

四聖獣が名前に入っているとは思わなかった。

しかも、女性にだ。

内心驚いている。

その時、扉が開く音がする。

珍しいな。

ここは滅多に客が来ないのに。

扉の方に振り向く。

女性だった。

金髪ロングヘアーで、後ろ髪先端をリボンで結んでいる。
外国人のような容姿だった。

中に入ってくる。

そして、俺たちの前で止まった。

「気配をたどってきてみれば、お前か」

「私じゃいけなかった？」

「そんなことはない」

男性のような口調だった。

日本語に訛りが無いし、日本人なのだろうか？
いや、ハーフという可能性もあるか。

「隣、座っていいか？」

「あ、はい。どうぞ」

「失礼する」

女性は俺の隣に座ると鏡を取り出した。

そして服や髪に乱れがないかチェックする。

こういうところは、女性らしいと思う。

「こんなところで何をしている？」

「お肉を奢ってくれるらしいから、こんなところにいるの」

「肉？」

「ここ、焼肉屋なんだよ。見えないだろうけど」

俺が横から説明を加えた。

「なるほどな。ならば何故、コイツに肉を奢るんだ？」

「美人な女性がお腹を空かせていたから。ただそれだけさ」

「美人？ コイツが？ ハハッ。それはないな」

いや、誰がどう見ても美人だと思う。

個人の趣味は置いておくがな。

「こいつは『死』そのものだ。それが美しいと思うなら、死に魅せられてるだけだ」

「何？」

朱雀を改めて見てみるが、死の恐怖は感じない。

「分からないな」

「分からない？ お前は鈍感なのか？」

「いや、そう言われても……」

「お前は私が美しく見えるか？」

「？ 普通に美人だろ」

外国人の容姿をしていて話しづらいかもしれないが、それでも声をかけてくる男性はいるだろう。

「破壊の権化である、私ですら美しいか。こいつは面白いな
珍しそうに俺を見てくる。」

「ダメよ。その子は、あの人が狙ってるもの。下手をしたら地獄を見るわよ」

「いいさ。私の破壊に勝てるのなら、な」

「その自信はどこから来るのかしら？」

やれやれと呆れていた。

そして、着物の袖から扇子を取りだし扇ぐ。

「お待たせしました」

カウンターの奥から声が聞こえてきた。

哲さんが鉄板を持ち、やって来る。

随分と厚い肉だ。

「国産黒毛和牛の肉800グラムだ」

「そんなものどうやって手に入れたんですか！？」

「ちよっとした伝だよ、証君」

鉄板の上で肉が音をたてている。
こちらの食欲も注ぐ。

「ありがとうございます」

「どういたしまして。ご飯も持ってくるから、ちょっとまってな」
茶碗にご飯が盛りだくさんつがれるのが見える。

「お待ち！」

それが朱雀の前に置かれた。

「じゃあ、いただきます」

バスケットに入れられていたナイフとフォークを手に取り、優雅に
食べ始めた。

「いいご身分だな」

「君の分も頼もうか？」

「いらない」

立ち上がり、店を出て行った。

朱雀と話すために来ただけなのか？

「ご馳走様」

「早いよ！」

優雅に食べていたにも関わらず、食事の速さは尋常ではなかった。

「1000円になります」

「1000円!? 安すぎじゃあないですか？」

「言っただろ。伝で仕入れたんだ。元はとれてるから安心しな」

「ならいいのですが」

お金を払い、店を出た。

「今日はありがとうね。美味しかったわ」

「喜んでもらえて何よりです」

「だから、いいことを教えてあげる」

いいこと？

まさか、スリーサイズか!?

「私はN O. 4の愛美華。そして、竜田君の隣に座った女性も愛美華よ。N O. 3のね」

「え？」

「今度会うときは敵かしらね？ では」

一瞬で俺の前から消え去った。

俺は呆然とするしかなかった。

死と破壊（後書き）

主人公もいろいろと大変です。

一歩手前（前書き）

今後の事を考えながら書いてたところになった。

一歩手前

7月21日 木曜日

「明日で1学期も終わりか。早いもんだな」

「そうだねえ。敦、夏休みの予定はあるう？」

「無い。義と証は？」

「無いよお」

「もしかしたら、日本中を旅するかも」

・・・

「「なにいいい！？」」

声が重なった。

しかも、反応が遅い。

気持ちちは分かるけどな。

「何でだよ！？」

「理由はあ？」

「うーん。自分を鍛えるためかな？」

「聞くな！」

「本気？」

「本気や真剣と書いて、マジと読むぐらい」

「わからねー」

俺も分からん。

でも、嘘は言っていない。

愛美華に少しでも抵抗するために、鍛えなければならない。

足手まといにならないように、自分の身は自分で守るつもりだ。
どうしようもない時は、誰かに頼るけどな。

「まあ、証が本気なことは分かった。応援してるぞ」

「おう！」

放課後

いつもの帰り道を3人で帰る。

3人で帰るのも久しぶりだな。

「今日、証の家に遊びに行っていないか？」

「あ、俺もお」

この2人とはしばらく会えなくなるだろうし、今の内に遊んでおくべきか。

「うん。別にいいぞ」

しかし、これが後悔に繋がるとを、今の俺は知らなかった。

しばらく歩くと家に到着した。

扉に手を掛け

「ただいま！」

「お帰りなさいアナタ。お風呂にする？ ご飯にする？ それとも

ワ・タ・シ？」

ゆっくりと扉を閉めた。

何かの幻聴や幻だ。

家に帰ったら、虚が裸エプロンで待ち構えていたなんて事はない。

もう1度扉を開けた。

「夜の営みをする？ 子作りをする？ それともセ・イ・コ・ウ？」

「同じじゃねえか！」

「違うわ。夜の営みと性交は避妊出来るもの」

「確かに。でも、性交をするという事実は変わらない」

「あはっ。ばれた？」

虚の相手は疲れるな。

あれ？

何か大事な事を忘れている様な……。

背後から殺気！？

思わず身構える。

「どういふことか説明しろ」

「同じくう」

あー、そう言えば、敦と義がついてきてたんだな。完全に忘れてた。

初めて2人を遊びに連れてきた事を後悔した。

とりあえず、虚に服を着させて自己紹介させた。

「お姉さんは水嶋虚よ。よろしくね」

「証の幼馴染み兼友人の角馬敦です」

「同じく羽山義ですう」

「お姉さんの事は虚でいいわ」

「俺は敦で」

「義でいいよお」

それぞれ自己紹介が済んだ。

さて、ここからが正念場か。

「質問ある？」

「ずばり、証と虚の関係は？」

「それは――」

「性交しちゃう関係よ」

俺が答える前に虚が答えた。

いずれ、そんな関係になるかもしれないけど、まだやったことないだろ！

心の中でツツコミを入れる。

「何！？ 蓮華はどうしたんだ？」

「ハーレムを許してくれわ」

「なんとうらやま、じゃなくて、けしからん」

今、羨ましいと言おうとしたよな？

いくら幼馴染み兼友人の頼みだとしても、絶対にやらん！

「証抛は？」

「お姉さん、証君以外の男性に見られながらやるのは無理よ」

「それはそれでやってほしいけど、キスでいいよ！デープなので」

おい、本音が漏れてるぞ。

俺だって、虚の裸を俺以外の男性に見られるのは嫌だ。
虚は俺の嫁！

異論は認めん！

「しょうがないなあ」

いつの間にか虚の顔が俺の近づいていた。

「んっ」

「んむっ!？」

唇が重なりあう。

虚の舌が俺の口の中に入ってくる。

「んんっ、はむっ、くちゅっ、じゅる」

「んあ、くう、ぺちやつ、くちやつ」

舌と舌が絡み合い、卑猥な音が響く。

虚が俺の舌を絡めとり、唾液を奪う。

「くう、ふうっ、んんっ。ハアッ、ハアッ、んむ」

「くっ、くあ、むふっ。ハアッ、ハアッ、んふ」

虚の舌が俺の口の中を念入りに舐め回す。

時に歯を舐め、舌を絡めとり、唾液を吸う。

情熱的に、激しく、俺から何かを奪い取るかの様に吸い付く。

「あの一、そろそろ」

「ん？ ああ、そうね。あなた達、帰っていいわよ。今からするか
ら」

何とは言わない。

それに対して敦と義も『何を?』とは聞かない。

2人は静かに部屋から出ていった。

「さあ、するわよ」

「マジ？」

「うん。それとも嫌？」

「とんでもない！」

俺の初めては虚になるな、と思ったのであった。

一歩手前（後書き）

次回、いよいよ18禁シーン突入。

これで虚の強さ、美しさ、華やかさがグリーンとアップするよ。能力も質も上がるし、強力になる。

いやー、18禁は避けては通れない道だけど、早いかな？

でも、この辺りで1人でも強力にしないと、後々大変になるだろうし、むしろ遅いかも。

敵にもチートキャラが居るもんね。

では次回

★★★初めての★★★(前書き)

R18描写がされています。

苦手な人や18歳に達していない人は、『戻る』もしくは『×ボタ
ン』を押してください。

★★初めての★★

今俺は、押し倒されているような形にいる。上には虚。

「お姉さんにどうしてほしい？」

「まずはキスから」

「あんなにやったのに？」

「ああ」

「素直な男性は、お姉さん好きよ」
虚が唇を近づけてくる。

「ん……」

柔らかな唇。

虚の熱が、唇の隙間から流れ込んでくる。

甘い陶酔が、俺の中に染み込む。

おそらく、高級酒よりも強い。

1度離れ、また唇を合わせる。

前よりも激しく。

「ちゅ……んむ……ちゅっ……。んっ……。ちゅ、くちゅっ……」

虚が一生懸命口づけをしている。

愛しさがこみ上げる。

「むう……。ちゅっ……。証君……。ちゅっ……。証、君……」

少し汗ばんだ肌の感触が伝わってくる。

より強く虚を引き寄せ、唇を舌で開く。

「んんっ……」

舌で口内の粘膜を舐める。

ぬめりとした感触がした。

虚の舌が俺の舌を絡めとる。

「ちゅるっ……。んむっ、くちゅっ……。ちゅっ。んんっ……。ふわっ……
…びちゅっ……。れろっ」

舌の柔らかさと、歯の硬さを味わう。

中に入れたい欲求が高まっていく。

「ちゅるっ……ぴちゅっ、くちゅっ……。んんっ……んっ、んっ……ちゅるっ」

永遠ともいえる時間の中のキス。

しかし、そこで虚が離れた。

「邪魔ね」

着ていた物を全て脱ぎ捨てた。

裸体の虚が姿を表す。

白く、みずみずしい肌。

体の曲線がはっきりと分かるほど、虚のスタイルは良かった。

「証君も脱ぎなさい」

「あ、ああ」

俺も着ていた物を脱ぎ捨て全裸になる。

「お姉さんが上でしてあげる」

「頼む」

個人的には、虚を四つん這いにしてしまったが、上ですると言っているのだ。

ここは素直に聞いておこう。

「じゃあ入れるわよ？」

「……ああ」

くちゅ……

先端が触れた。

そこからゆっくりと、腰を落としていく。

「うっ……く……」

虚の眉が歪んだ。

虚にだって痛覚はある。

痛いはずだ。

「うっ……あっ、あ、あ……」

まず、亀頭の部分が入る。

ゆっくりと沈めていく。
そして、奥にぶつかった。

「うっ……！うああっっ！！」

性器全体が、温かなものに包まれた。
しかし、強烈な締め付けだ。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

結合したまま息を吐く。

「虚、大丈夫か？」

「うん……。証君のだからね」

柔らかに微笑んだ。

その微笑みに鼓動が激しくなる。

今すぐ動き出したい！

「ごめん」

先に謝っておく。

そして、腰を上下に降り始めた。

「っっ……くっ……あ、あ……んんっ」

「いい！」

「くっ……ああっ、あっ……あ、あ……」

虚の顔は苦痛で歪む。

しかし、俺は腰を揺する。

快感は高まっていく。

「んっ……くっ……んあっ、んっ。ん、あ……あっ……あ、あ、あ
っ」

ちゅっ……ぴちゅっ……くちゅっ……

「はっ、あっ、んっ、うっ」

「気持ちいいぞ」

「ありがんううっ、とう……やうっ……んあっ、あああっ……こす
れ、て……はうっ、あ、あっっ、ふあああっ！」

声質が変わってきた。

気持ちよくなってきたのだろうか？

「ひゃうつんっ、あうっ……はげ……激しいわ、証……君……ああっ」

「あ、証君……あうっ……あああっ……証、んあっ……君っ！」

じゅっ、くちやつ、ぬちゅっ！

くちゅっ、じゅぷっ、ぐちゅっ！

肉棒に愛液がまとわりつく。

柔らかな虚の性器を下から蹂躪する。

「ふああっ、証、君っ……ああっ、んああっ、ふあああっ」

虚が俺の手を握ってくる。

「いきそう？」

「うん。お姉、さん……んううっ……いきそう」

「俺もだ」

俺は虚の手を握り返した。

「ひうんっ、ああっ、やああっ、ひゃうつ、あっ、あっ、んんっん」

「だめっ……あああっ……ふああっ、あっ……やめっっ！」

虚の脚が開き、動きが速まる。

「うあっ、ああっ……はげ、しくて……だめっ！」

「ふああっ、やあっあっ、ひゃああっ、もう……もう……ああっ！」

「熱いのが……上がって……きて……あうっ、ひゃあっ、ふあああ

っ……やあああっ」

俺も下半身に熱がたまっていく。

「そろそろ、いくぞっ」

「んああああっ、くうっ、やああああっ、あっ、ああっ」

「やっ、ダメ。あが、上がってきて、ああっ、あっ、あっ、あああ

っ！」

「俺も！」

「激しく、て……うああっ、ひゃああっ、あっ……来る、来ちゃう

！……いやっ……やああああっ！」

「ややああああああああああっっ！……！」

虚の背が弓形に反った。

しかし、俺が熱を吐き出すことはなかった。
何故!?

「忘れ……はあ……たの？」

「何を？」

「お姉さんの……能力よ」

俺はその言葉で、虚の能力を思い出した。

『液体を操る』能力。

それが液体であるなら、成分が何であれ操る力。

俺の出るはずだったものも、虚の能力で出せなくなっていた。

「出したかったら、お姉さんを気絶させることね」

そこから、俺は全力で体力の続く限り腰を振り続けた。

結果的には出せたが、それは、虚のいった回数が2桁を越してからだ。

正確な数は覚えていない。

親がいなくてよかった。

本気でそう思った。

★★初めての★★(後書き)

やっちゃったぜ☆

反省も後悔もしていない。

完全催眠（前書き）

最近、クロス小説を書きたくなる。

主人公は型月のゼルレッチで、ゼロ魔、ネギま、なのは、東方の辺りとクロスさせたい。

ネギまだと、魔法世界で有名だろうな。

なのはは、「管理局の一部が気に入らん」とか言って、ケンカを売りそう。

東方だと、えーりんや姫様が、ゼルレッチのこと知ってそうだな。

紫は、噂だけは聞いたことがあるとか。

月の王を滅ぼしちゃったからね。

完全催眠

7月22日 金曜日

1学期もついに今日で終わる。

そして、長いようで短い夏休みの始まりでもあった。

今日は1学期終業式だけで学校は終わる。

そして、その終業式は、ぼーっとしているだけで、いつの間にか終わっていた。

いつもの帰り道を、いつものメンバー十3人で帰っていた。

十3人とは、蓮華、虚、霞の事である。

「証。お前に聞きたいことがある」

「何だ？ 敦。言ってみろ」

「俺の知らない女性が居るわけだが、どういう関係なんだ？」

「非常に簡単に言うと」

「永遠の愛を誓った仲です」

そんなもの誓った覚えはない。

誓った事はなくとも、永遠に愛するつもりではあるが……。

「なるほど。よくわかった。とりあえず、リア充爆発しろ」

「それが幼馴染みに言うセリフか？」

「氣にくわなければ、例え幼馴染みだとしても容赦しない」

義の語尾が小さな母音にならない、だと？

それほど怒っているのか？

こんな義を見るのは初めてだ。

「くそー、俺も夏休みに彼女作ってやる！」

「義！俺もついていくぞ！」

2人はどこかに駆け出していった。

ごめん、2人とも。

心の中で謝った。

「私が2人に何か言っておきましようか？」

「頼むよ、蓮華」

「はい。私が離れている間、2人が証さんを守ってください。特に虚さん」

「お姉さんに任せなさい！」

「では」

蓮華は駆け出していった。

蓮華、後からお礼をするよ。

蓮華が駆け出してすぐ

「ちよつといいかな？」

後ろから声をかけられた。

振り返ると中性的な女性が佇んでいた。

「何でしょう？」

「うん、実を言うとね」

その時、世界がモノクロに変わった。

この感覚も久しぶりだ。

しかし、目の前には声をかけてきた女性がいた。

愛美華か！

距離を大きくとった。

「おや？ このタイミングで張られますか」

残念そうに呟く。

「もう少し、あなたとは喋ってみたかったです、仕方ありません」

霞と虚が身構える。

来るか？

「殺すとしましよう」

背筋に冷や汗が流れた。

尋常ではない存在感が溢れる。

「冥王魅魔^{めいおうみま}。No. は6」

No. 6!?

能力は『完全催眠』と予想はしているが、実際どうなのだろうか？
「!？」

気づけば宙に舞っていた。
無様に地面に叩きつけられる。

しかし痛くない。

血は出ているのに。

「まさか……」

「気づきましたか？ でも遅い。既に痛覚を消させてもらいました」
何故だ？

特に催眠をかけるような行動はしていないはず。

ならば音（言葉）か？

あり得る話だ。

眼の可能性もある。

「残念ハズレだ」

俺の思考を読んだように、敵が呟いた。

「私の能力は『完全催眠』」

能力の予想はあっていたな。

肝心なのは、催眠をかける方法だ。

「私の『完全催眠』は、私が存在しているだけで発動しているんですよ」

しかも

「範囲は宇宙空間全て」

つまり

「私が存在している限り、完全催眠にかかっていることになります」
逃げようのない完全催眠。
勝てるわけがない。

これが番号1桁の愛美華の実力。

「お姉さんに任せなさい！」

液体が生み出された。

「テトラカルバニルニッケル、またはニッケルカルボニルと呼ばれ

る液体よ」

俺の知識が正しければ、無色・揮発性の液体だ。毒性が非常に高く「死の液体」の異名を持つ。

許容濃度は0.001ppm。

俺たちまで命の危険がある液体を出してくるな！と言いたい。

「無駄だよ」

虚の体中から血が噴き出した。

いつの間にか、魅魔の手には剣が握られていた。

いや、最初から握っていたのかもしれない。

「くそっ！」

黒い物体が霞の回りから出てくるが

「無駄だと言っただろう」

「能力が暴走!？」

能力は脳で制御している。

つまり、思考を狂わせれば能力も狂う。

「がっ!？」

霞の体が貫かれた。

そして、崩れ落ちる。

「さて、後は君だけだ」

「くそっ」

冷静になれ。

こんなときに、俺はどうすればいい？

考えろ。

虚と霞は戦闘不能。

ここは、思い出の公園。俺と蓮華が初めて出会った場所。今の俺に出来ることは

「蓮華ええええ!!!!!!」

力の限り叫んだ。

無情にも魅魔の持つ剣が振り下ろされる。しかし、

「大丈夫ですか？ 証さん」

蓮華が剣を受け止めていた。

「何者だい？」

「No. 66、如月蓮華」

「へえ」

魅魔は大きく下がった。

油断は出来ないのだろう。

「蓮華、気をつけろ。そいつは、存在そのものが完全催眠だ。既に催眠の中だと思え」

「そうですか。ですが、完全催眠など私の敵ではありません」
手に刀が握られた。

「参ります！」

「夢の中にご招待しますよ！」

蓮華は、正面にいる魅魔ではなく、右にまっすぐ進む。
まるで、そこに魅魔がいるかのように。

金属音が鳴り響いた。

「何故だ！？ 完全催眠は発動しているのに」

「私の能力の質の方が、あなたの能力の質よりも高いもの。忘れたの？」

能力は同じ系統の場合、能力の質が高い方が勝つ。

ただ、それだけの理由だ。

「くっ！？」

魅魔は大きく下がるが

「無駄です」

既に蓮華が背後にいた。

「あなたの敗因は、自分の能力を過信しすぎたこと。ただ、それだけですよ」

蓮華が魅魔を切り裂いた。

「私の能力は『幻術を現実にする』^{もうそう}。あなたに勝ち目などありません

ん」

ただ、完全催眠が効かない自分を幻術もうそうした。

ただ、それだけだ。

蓮華の能力は、その気になれば物理法則を書き換え、人の命すら造り出す。

1種の神と言ってもいい。

そんな能力が完全催眠に負けるわけがなかった。

完全催眠（後書き）

ふう……。

やっと投稿出来た。

そろそろヒロイン増やそうかな。

重力（前書き）

眠い

重力

7月23日 土曜日

「証さん、朝です。起きてください」

「んん？」

眠りから覚めると蓮華が目の前にいた。
あれ？

何で居るんだ？

「朝ごはんができましたから、下りてきてくださいね」
頬を2度叩き、眠気を吹き飛ばす。
とりあえず、1階に下りることにした。

下りると父、母、蓮華、虚、霞が食卓を囲んでいた。

そこで昨日の事を思い出す。

夏休みが始まり、戦いがさらに本格的になる。と言うことで、3人は荷物を持って、俺の家に泊まっている。
今年の夏は、賑かになりそうだ。

食後、俺の部屋で3人と今後の予定を決めていた。

と言っても、いつ結界を張られるかが分からない戦い。
運よく結界が張られるとは思わない。

どうしたものか。

「証さん。1つ聞いてもよろしいでしょうか？」

「何だよ？ 蓮華」

「虚さんと性交した感想は？」

「ぶおううーっっ！」

思わず吹き出した。

だってそうだろう？

今後の予定を決めている時に、そんな事を聞いてくるとは思ってもみない。

「何で、知ってるんだよ!？」

「虚さんの美しさや華やかさが、とても高くなっています。そこから、まず間違はなく、性交したと考えられます」

同じ愛美華だからこそ分かるのか？

そう思う俺も、虚が美しくなったと思えるし、華やかになったとも思える。

人間の俺ですら、眼で違いが分かるほどだ。

蓮華や霞には、明確な違いが分かるのだろう。

「よし、出掛けるぞ!」

俺は、この空間から逃げ出すために言った。

今すぐ逃げ出したい気分だったから仕方がない。

「どこに行くのですか？」

「時間があるし、隣町まで行くぞ」

隣町には、数えられる程度しか行ったことがない。

新しい風景として観ることが出来るだろう。

「それなら、私の能力で連れていきます」

「行けるのか？」

「はい。剣道の練習試合で、隣町の高校には何度か行った事がありますから」

「じゃあ、頼むわ」

「わかりました」

蓮華が、俺たちが隣町の高校の校門前にいる事を幻術もうそつする。

それはすぐに現実へと変わる。

気づけば知らない場所にいた。

「すげえな」

「この程度、難しくはありません」

「ははっ。とりあえず、案内頼む」

「分かりました」

蓮華の後ろをついていく。

この辺りは全然知らないな。

住宅は、俺たちの町よりも少し多いくらいか？

「こういうのも悪くないな」

「そうね。お姉さんも同意見だわ」

しばらく歩くと、流石に汗が流れてくる。

夏の陽射しは尋常じゃないな。

「ん？ あれは、アイス屋か？」

「どこどこ？」

「ほら、あそこだよ。霞」

右斜め前を指差す。

まるで、海の家を思わせる建たずまいの家。

その入口には『氷』と書かれていた。

「お金は持ってきてるし、みんなで食べよう」

「そうですね」

海の家（？）に入っていた。

そこには先客が2人いた。

「あら？」

「これも運命かしらね」

1人は、黒髪ロングヘアーで、黒いドレスを着た女性。

もう1人は、淡いピンク髪のボブヘアーで、着物を着た女性。

黒髪の女性は初めて会ったが、公園で会った女性程ではないが危機を感じた。

公園で会った女性に似ているが、纏っている雰囲気は段違いだ。

それに、公園で会った女性はプラチナのように白く輝く髪を持っていた。

「あなたは！」

3人が身構える。

敵という事だろう。

「心配しないで。結界が張られようとも、戦う意思はないから」

「前に同じよ」

戦闘意思が無いことをアピールする。

「お姉さんは非常に気になるんだけど、あなたたちは仲間なの？」

「違うわ」

「偶然出会っただけよ」

口を揃えていった。

綺麗に口を揃えて言われると、逆に怪しく感じてしまう。

仮に嘘だったとしても、綺麗な女性だし許す！

「一先ず座ろう。休めないし」

さりげなく朱雀の隣に座る。

「私の隣に座らないの？」

「いや、冷や汗が止まらないし」

「良いこととしてあげるから」

「座ります！」

変わり身が早い？

いや、普通だろ。

綺麗な女性に良いことされるなら、命を賭けても座ってみせる！

「失礼します」

「ねえ？」

「何でしょう？」

「やっぱり、膝の上に座ってくれない？」

なん……だと？

膝の上に座る？

こんなにも綺麗な女性の？

最高すぎるだろ！

「やつふおーい！」

掛け声とは裏腹に、優しく膝の上に座った。

何故？

痛い思いをさせたらまずいだろ！

「ふふっ。いい子ね」

後ろから抱きしめられる。

こ、これは！

ドレスの上からで分らなかったが、胸がとても大きい。

おそらく、蓮華と20センチは違うな。

祝福の時だな。

「稀に、何で証さんを主にしたんだろう？と思うことがあります」

「うん、まあ……ね」

「それは……ね」

そんなの俺の事が好きだからに決まってるだろ！

え？

ナルシスト？

構わないだろ！

事実だしな！

その後は、3人がアイスを食べ終わるまで、女性に抱かれていたとか。

アイスを食べ終わると、すぐに俺の手を掴み、そこから出ていった。

「そんなに急ぐなよ」

「私、あの女を殺しちゃうよ？ 構わないよね？」

だって、証君が好きなのは私だけだし、他の女なんていらないよね？

それとも、私よりもあの女が好きなの？

そっかー。なら、早く始末した方がいいよね？

証君が見てるのは、いつも私なんだから」

能力を発動していない霞がヤンデレになっていた。

嫉妬で能力が暴走してるのか！？

そんな時に、世界がモノクロに変わった。

「うわー。私って運が良いのかな？これで、合法的に殺せるんだもん」

「止めなさい！」

蓮華が霞の頭を叩いて止めた。

「アナタでは手も足も出せないまま、返り討ちにあうだけです。それは、私もですが……」

「お姉さん、現実を直視すると悲しくなるわ」

場がカオスになりかけていた。

「おいおい、何だよ？ 可愛い子ばっかじゃねえか！」
後ろから男性の声。

振り返ると厳つい顔の男性がいた。

横には背の小さな女性。

敵の愛美華か。

「おい、ガキ。アイツを殺れ」

そう言って、俺を指差した。

しかし、女の子は首を横にふる。

「クソガキ。分かってないようだから、もう1度言ってやる。アイツを殺れ」

やはり女の子は首を横にふった。

「何を嫌がってやがる！ 俺は、殺れと言ってるんだよ！

これは命令なんだ。拒否なんてどこにも存在しねえんだよ。分かったらとっと殺れ！」

女の子を後ろから蹴り飛ばした。

そこで、俺の怒りが頂点に達した。

俺は全力で駆け出し

「お前が死ねえええ！」

全力で腕を振るった。

「おっと」

軽くかわされた。

追撃をするために近づこうとする。

しかし、女の子に行く手を遮られた。

「何で遮るんだよ！ アイツは君を蹴り飛ばしたんだぞ！」

「他人を……傷つけ……るのは……よくない」

他人は傷つけない。

だから、自分が傷つこうというのか？

「何で、お前はこの子を傷つけるんだよ！」

「傷つける？ バカを言うな。これは制裁だ。」

傷つけているように見えるのは、お前の価値観だろうが」

「でも、制裁と思うのだってお前の価値観だ」

「ああ、その通り。俺は俺の価値観を貫く。ただ、それだけだ」

男の信念は固い。

最早、言葉は要らず……か。

「だったら俺は、この子を救ってみせる」

「とんだ偽善者だな！」

男が接近してきた。

「偽善者でいい。いくら罵られようが、俺は生きる道を変えられない！」

左足の回し蹴りを防ぐ。

男は防がれた左足を上に上げ、降り下ろした。

1歩さがり、攻撃を避ける。

「そうまでして、ガキを助けたいか？」

「助けるんじゃない！ 救うんだよ！」

助けるのと救うでは意味が違う。

どんなに愛した相手であっても、殺さなければならない時がある。

殺したいほど憎い相手であっても、助けなければならない時がある。

救うとは、相手の心をまで助けなければならない。

助けるよりも、救う方が難しい。

「オラッ！」

「うおおおお！」

相手のストレートをギリギリでかわし、ストレートをくり出した。決まる！と思ったのだが、初心者浅知恵か、簡単にかわされてしまう。

「遅すぎだ!」

回し蹴り!

衝撃を覚悟したのだが

「だめー!」

体の動きが封じられた。

俺だけではなく、男もそのようだ。

いろいろな方向に引っ張られる感じ。

これは

「重力で動きを固めているのか!」

空気中には窒素、酸素、二酸化炭素などの分子が存在する。

もちろんそれらは、とても微弱な重力を持っている。

つまり、その重力を強力にする事で、体がいろいろな方向に引っ張られ、動きがとれなくなる。

「どうしても、敵対するなって言うのか?」

「はい。僕の……マス……ター……だから」

僕っ娘だと!?

許せる!

しかも、よく女の子を見ると、背は低かった。

しかし、胸は大きかった。

ロリ巨乳だと!?

許せる!

「君、俺の愛美華にならないか?」

「……え?」

「は?」

男も、何を言っているんだ、コイツは?と言いたげな顔をしている。

「実は、あと7人ほど愛美華と契約できるらしい。だから、君と契約をしたい」「無理……です。……僕は……契約を……してい……るから」

「ならば、契約を切れればいいのです。契約を切ってあげましょうか?」

「え？」

「決めるのは貴女です。好きにしてください」

「僕は……」

「何を迷ってやがる！ テメエは俺の所有物^{モノ}だろうが！」

男が吠える。

訴えるように。

逃がさぬように。

「僕は……！」

「君の人生だ。好きに決めればいい。俺と契約してもよし、そいつ
というのもよし。さあ、決めてくれ」

俺は、決して君を咎めたりしない。

在り方を否定しない。

存在を忘れない。

そのためにも

「俺は君の事が好きだ！ だから、名前を教えてくれ！」

必死の思いを伝える。

嘘ではない、本気の気持ち。

「……僕の……名前……は……小松^{こまつ}……小菜^{さいな}」

何故、名前を言ったのだろう？

別に教える必要なんて無かったのに。

それは、少なからず、あの男が苦手だった。

もしくは、俺に興味を持ったからだ。

「来い！ 小菜！」

俺は、精一杯の声で叫んだ。

これで、こちらに来なければ、敵として戦わなくてはならない。

さあ、どうする？

「ごめんな……さい」

頭を下げたのは、男に向かってだった。

「謝るな！ それがお前の選んだ道なら、悔いの無い選択なら、なお
さらだ！」

「……はい」

「まったく」

蓮華は呆れながらも「やっぱり証さんは、証さんか」と呟いていた。
なんの事だ？

「くそつたれええええ！」

男は力の限り叫んでいた。

契約が切れたのだろう。

「頑張り……ます」

「ああ」

俺は小菜の頭を撫でた。

「勝手にしやがれ！」

男はどこかに言ってしまった。

俺たちに、仲間が増えた瞬間でもあった。

重力（後書き）

眠
た
か
っ
た
。

1と0（前書き）

遅くなってごめん。
でも、しょうがないよね？
作者だって人間なもの。

1と0

7月24日 日曜日

「小菜の能力と番号を教えてください」

「僕の……番号……は……31。能力……は……『重力を……操……
……る』……です」

どんな小さな物質だろうと、重力を持つ。

例えばそれが、原子や素粒子のような極小な物質であってもだ。

そういった重力を操る能力。

その気になれば、ブラックホールも作り出す事ができる。

それが小菜の能力だ。

「さらに言うと、下1桁が1の愛美華の能力の本質は『力』です」
霞がつけ足した。

重『力』だもんな。

なら、電磁気力、小さな力、大きな力もあると考えた方がいいだろう。

「なるほど。蓮華、霞、虚の3人は、黒いドレスを着ていた女性を知っているようだったけど、どうなんだ？」

「……知っています」

「蓮華が話してくれるなか？」

「はい」

1度深呼吸をする。

「あの愛美華は、今回の戦いの優勝候補……いえ、優勝間違いなしと言われています」

優勝間違いなし、か。

どれほど、凶悪な能力を持っているのだろうか？

「これは予想ですが、No.10。下1桁が0の愛美華です」

「そして、下1桁が0の愛美華の能力の本質は『愛美華そのもの』

です」

つまり、どういうことだ？

わけがわからない。

「下1桁が0の数字を持つ愛美華たちは、美しさ、もしくは華やかさ、その両方が、生まれたときから高い連中なんです」

つまり、それだけ強いということだろうか？

「その美しさや華やかさを利用する能力こそが、下1桁が0の愛美華です」

なるほとな。

よくわかった。

「それで、ですが」

それを強調して言った。

何だろうか？

「あの女性たちの事を何か知っていそうな雰囲気でしたよね？
話
してください」

隠すような事でもないと思い、ありのままを話した。

「証さんは、バカだったんですね」

「いや、俺は」

「アホとも言いわ」

「命知らずね」

「僕で……も、そ……んなこと……はし……ません」

酷い言われようだった。

この後は確りと怒られて、今日の1日を終えるのであった。

1と0（後書き）

完結はさせます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8042x/>

愛美華(まびか)

2011年12月6日09時47分発行